

京都府埋蔵文化財情報

第 142 号

研究ノート 城陽市芝山遺跡・芝山古墳群の土地利用について ----- 菅 博絵	1
京都府庁の煉瓦建物について（上） ----- 井畠良太・加藤雄太	9
発掘調査からみた近世民家成立に関わる事例紹介 ----- 桐井理揮	17
城陽市芝山遺跡からみた久津川古墳群 ----- 小池 寛	25
令和3年度発掘調査略報 -----	33
5. 上野遺跡第4次	6. 外村遺跡
7. 稚児野遺跡第4次	8. 金生寺遺跡第10次
9. 犬飼遺跡第10次（L地区）	10. 木津川河床第37次
長岡京跡調査だより・138 -----	41
現地公開（令和3年12月～令和4年2月）-----	43
普及啓発事業（令和3年12月～令和4年2月）-----	45
センターの動向（令和3年12月～令和4年2月）-----	47

2022 年 3 月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

城陽市芝山遺跡・芝山古墳群



芝山古墳群V支群調査地上空から城陽市街地を望む



芝山古墳群III支群 2号墳埋葬施設

研究ノート

城陽市芝山遺跡・芝山古墳群の 土地利用について

菅 博 絵

1. はじめに

芝山遺跡は、城陽市南東部の丘陵上に位置する東西約950m・南北約840mの範囲の縄文時代から中世にかけての複合遺跡である(第1図)。付近には縄文時代から古墳時代の集落遺跡である森本遺跡や、芝山遺跡と同丘陵上に位置する古墳時代前期の前方後円墳である梅の子塚古墳群などが所在する。

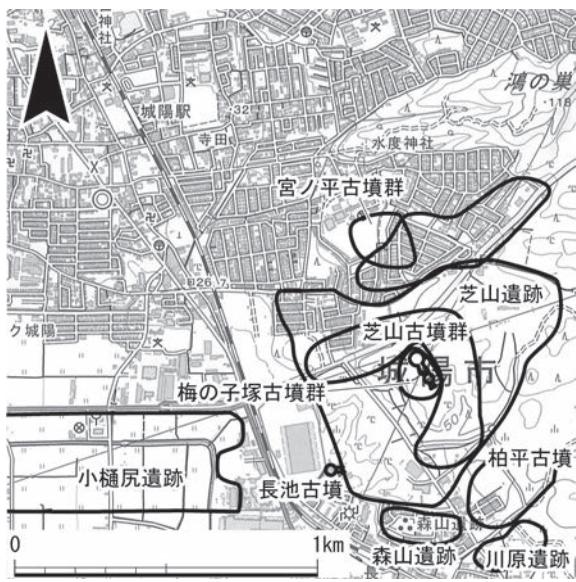
1977年にその存在が明らかになって以降、同年の城陽市教育委員会による発掘調査から令和2年度に至るまで21回の発掘調査が実施されている。これらの調査の結果、古墳時代前期から飛鳥時代の堅穴建物や奈良時代の道路状遺構、奈良時代から平安時代の掘立柱建物100棟以上が検出されている。

同遺跡内に広がる芝山古墳群は、古墳時代前期末から後期後半にかけての小型の方墳や中小型の円墳からなる古墳群である。そのほか木棺墓や埴輪棺墓なども検出されている(第2図)。

2. 古墳の規模の再計測

芝山古墳群で検出された古墳の規模は各報告書・現地説明会資料によって計測位置にバラつきが見られるため、基準を統一して計測を行った(表1)。検出された古墳は後世の削平の影響を大きく受け墳丘が残存しないものが多く墳丘の規模や周溝幅を正確に把握することは困難である。

そこで今回は周溝の芯々間を古墳の規模とし計測を行った。また、本論では15m未満の古墳を小型とし、15m以上の古墳を中型と呼称する。



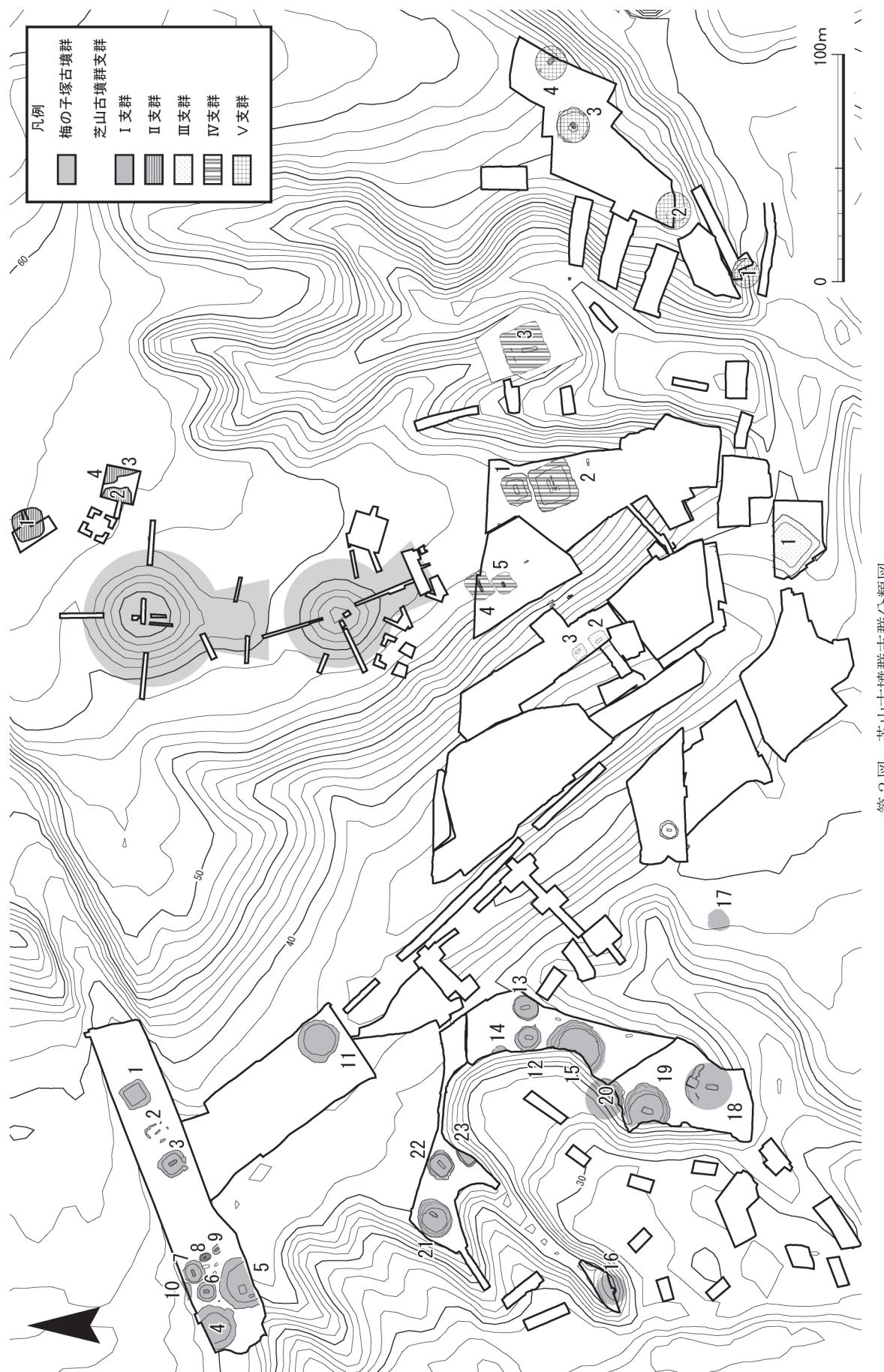
第1図 調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 宇治)

3. 古墳の分布と支群

芝山古墳群は小泉裕司が『城陽市史』の中で丘陵上部に分布する一群と標高35m付近の丘陵平坦面に分布する一群の2群に分けられた。その後発掘調査の成果から古墳の分布域が広がりと市史を基に5つの支群に分けることが可能である(第2図)。

I 支群は、標高35m付近の丘陵平坦面に築



第2図 芝山古墳群支群分類図

造された小型の方墳や中小型円墳の一群である。埋葬施設は木棺直葬で、須恵器や土師器、鉄製武器などが副葬され古墳時代中期後半から後期に築造されたと考えられる。

II支群は、梅の子塚1号墳北東に築造された小型方墳からなる一群である。埋葬施設は残存しないため詳細は不明であるが、周溝内から出土した須恵器より中期前半に築造されたと考えられる。

III支群は、標高40m付近の丘陵平坦面と斜面の境に築造された古墳の一群である。現在3基の古墳が確認されているが、2・3号墳は、周溝と墳丘は検出しておらず、墳形と規模は不明である。3号墳は丘陵斜面と分ける境界溝があることや、2号墳から出土した蛇行剣は関西では墳丘を持つ古墳から出土する例が多いことから両古墳は墳丘を持っていた可能性が高い。1号墳が方墳であること、築造時期からも2・3号墳も方墳であったと考えて矛盾ない。埋葬施設はいずれも木棺直葬で鉄製武器などを副葬する。周溝から出土し

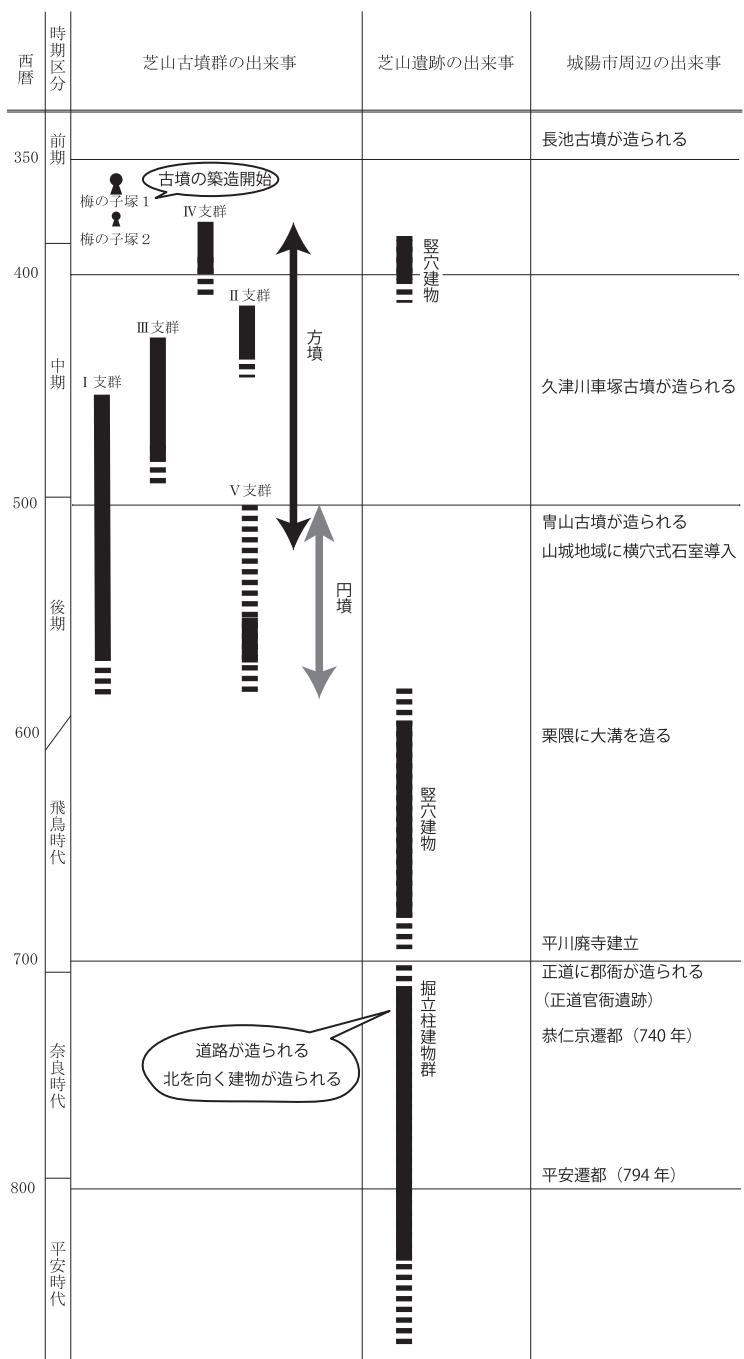
表1 芝山古墳群一覧

	古墳名	墳形	規模 (m)	埋葬施設	須恵器編年 () は周溝出土
I 支群	1号墳	方墳	10×10.4	削平	(TK 208)
	2号墳	方墳	8.5×8	木棺	-
	3号墳	方墳	9.5×10.5	組合式木棺	TK 23・47
	4号墳	円墳	径17.4	削平	(MT 15)
	5号墳	円墳	径20	削平	-
	6号墳	円墳	径7.4	組合式木棺	TK 10
	7号墳	円墳	径8.1～9.3	組合式木棺	
	8号墳	楕円形墳	径3.2～5	組合式木棺	TK 43
	9号墳	楕円形墳	-	木棺直葬	TK 217
	10号墳	円墳？	-	-	-
	11号墳	円墳	径16.4	削平	-
	12号墳	円墳	径10	組合式木棺	MT 15
	13号墳	円墳	径11	組合式木棺	TK 10
	14号墳	円墳	-	木棺直葬	-
	15号墳	円墳	-	削平	-
	16号墳	円墳	径22.4	削平	(MT 15)
	17号墳	円墳	約径8.6	組合式木棺	TK 43
	18号墳	円墳	約径19	組合式木棺	TK 10
	19号墳	円墳	径18.2	組合式木棺	TK 10
	20号墳	円墳	-	削平	-
	21号墳	円墳	径14	削平	-
	22号墳	方墳	9.8×10.2	組合式木棺	TK 47
	23号墳	方墳	-	削平	-
II支群	1号墳	方墳	9.6×8.7	削平	-
	2号墳	方墳	9.8×10.7	削平	-
	3号墳	方墳	-	削平	-
	4号墳	方墳	-	削平	-
III支群	1号墳	方墳	19×18.5	削平	-
	2号墳	不明	-	組合式木棺	-
	3号墳	不明		組合式木棺	-
IV支群	1号墳	方墳	11.2?	割竹形木棺	-
	2号墳	方墳	17×15.5	割竹形木棺 土壙墓1	-
	3号墳	方墳	不明	割竹形木棺	-
	4号墳	不明	不明	粘土櫛	-
V支群	1号墳	不明	-	-	-
	2号墳	円墳	径17.5	不明	-
	3号墳	円墳	径12.5	組合式木棺か	-
	4号墳	円墳？	-	組合式木棺	MT 15

た埴輪や、副葬品から中期中葉に築造されたと考えられる。

IV支群は、梅の子塚2号墳南東に築造された小型方墳の一群である。埋葬施設は割竹形木棺の木棺直葬で、玉や鏡などを副葬品から中期初頭に築造されたと考えられる。

V支群は、芝山遺跡の南西に延びる標高50m付近の丘陵平坦面に築造された小型円墳の一群である。埋葬施設は木棺直葬であり、須恵器や鉄製武器などの副葬品から後期前半に築造されたと



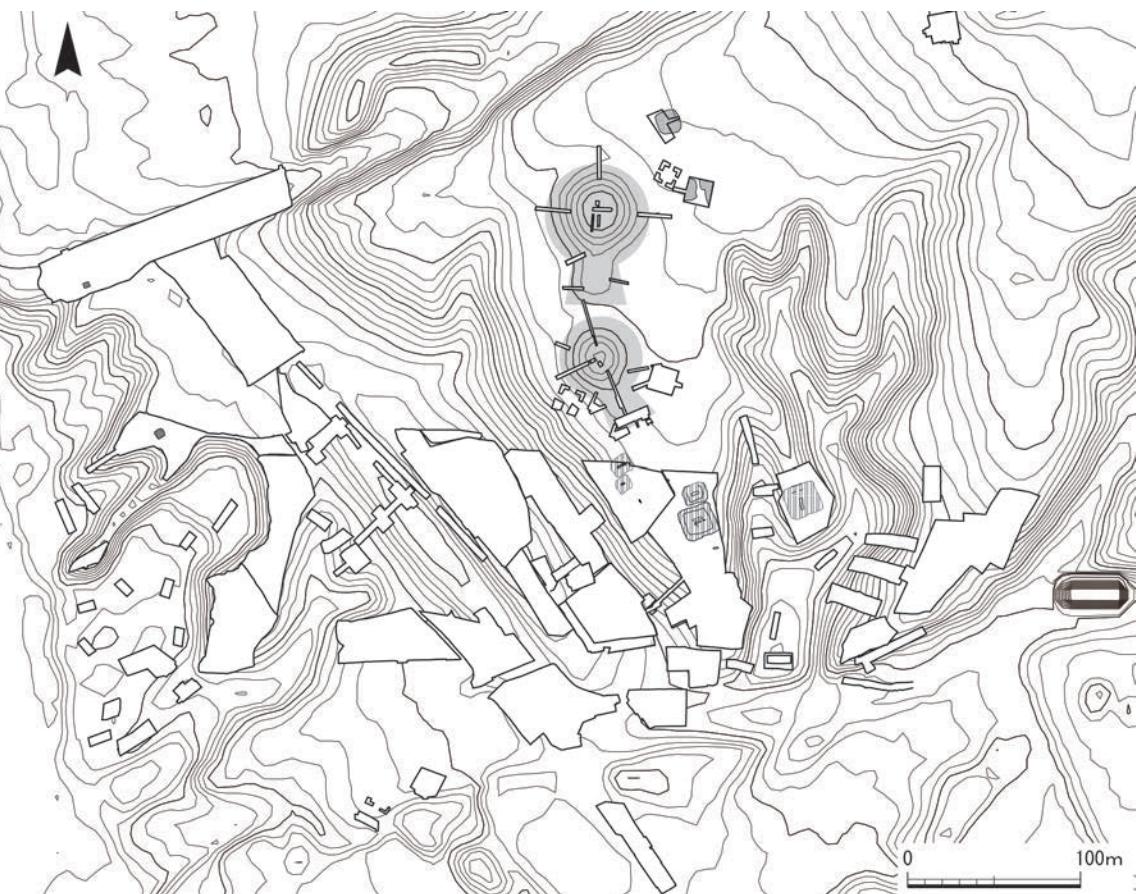
第3図 芝山古墳群・芝山遺跡の遺構変遷及び周辺の出来事
〔現地説明会資料〕2020を一部改変)

考えられる。

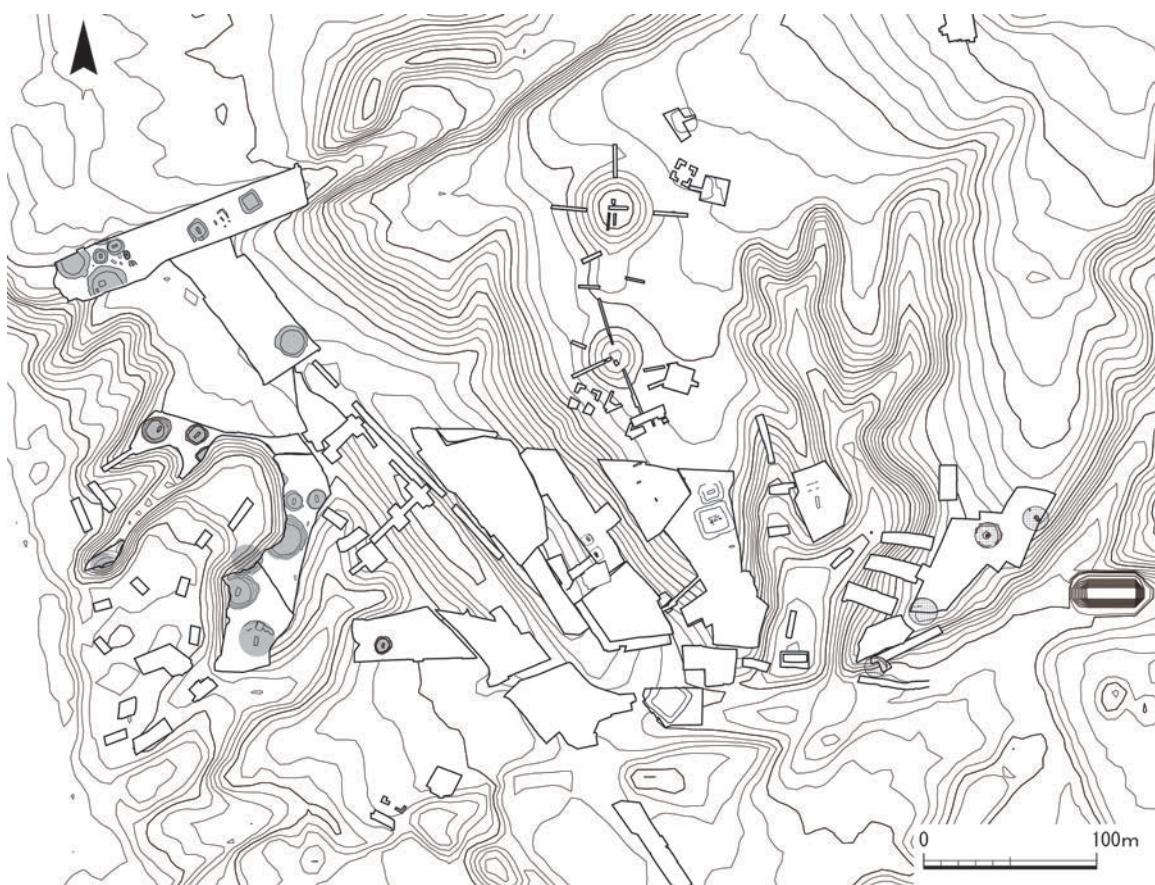
4. 芝山遺跡・芝山古墳群の遺構変遷

芝山遺跡では縄文時代から弥生時代の遺構は検出されていないが、縄文土器や弥生土器などの遺物が出土していることから、付近に遺構が存在するか森山遺跡などの集落の人々が狩猟等で利用していたのだろう。

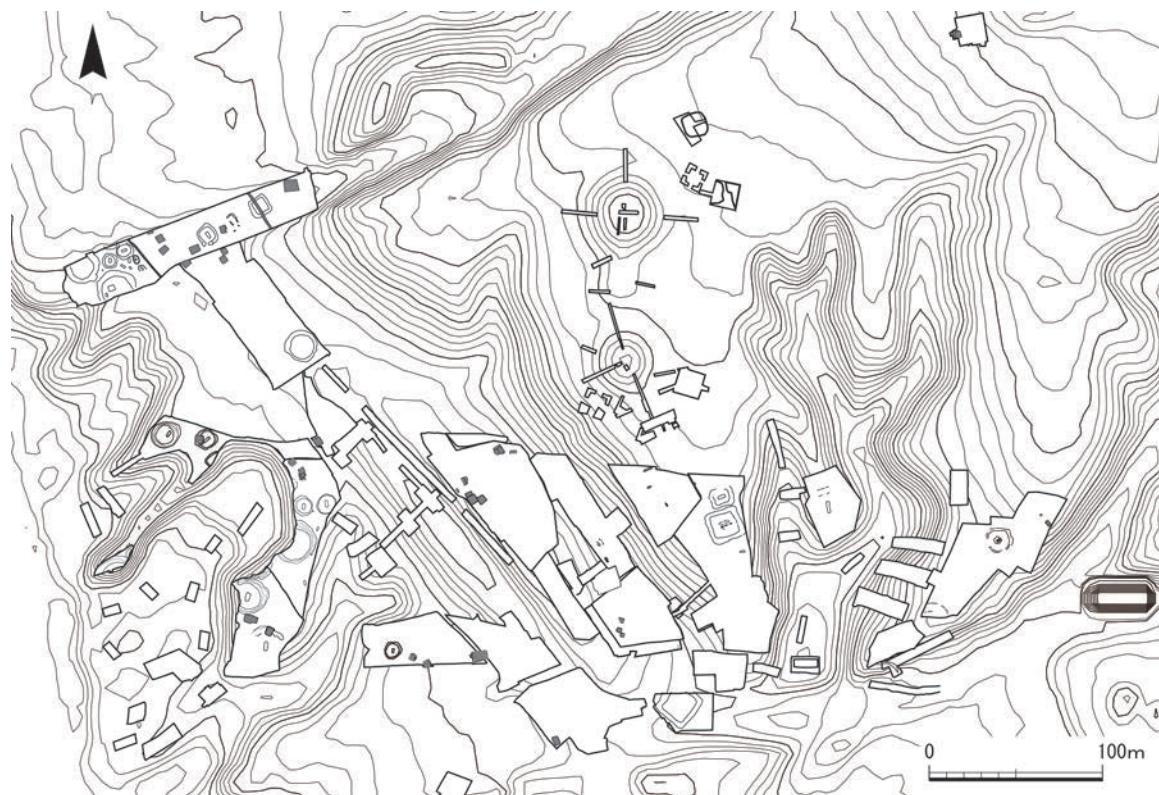
古墳時前期末になると標高50mの丘陵上部で梅の子塚古墳群の築造を契機とし、その南側に小型方墳が築造される(IV支群)。標高30m付近の丘陵平坦面では堅穴建物が造られる。堅穴建物は単独で検出されており、集落の規模は不明である。古墳時代中期初頭になると墓域が梅の子塚古墳群の南側から北西側へ移り小型方墳が築造される(II支群)(第4図)。その後中期中半になると標高35m付近の平坦面では丘陵の斜面に中小型方墳が築造される(III支群)ようになり、堅穴建物が建てられなくなる。中期後半になると、平



第4図 古墳時代前期の遺構配置図



第5図 古墳時代中期から後期の遺構配置図



第6図 古墳時代末期から飛鳥時代の遺構配置図



第7図 奈良時代以降の遺構配置図

平坦で小型の方墳や中小型の円墳が造られる（I支群）ようになる（第5図）。古墳時代中期中半から標高35m付近の平坦面が墓域となり、支群内では初期には小型方墳を築造していたが、時期が新しくなると円墳へと移行していく。方墳と円墳との間に時期や築造場所に大きな差が見られないことから同一集団が築造したと考えられる。前期の小型方墳を踏襲していた墓制が後期になると円墳へ墳形が変化する例は、同市芝ヶ原古墳群や木津川市上人ヶ平古墳群でも見られる。丘陵上部では造墓活動が停止あるいは、丘陵の東側へ墓域が移動する。

古墳時代後期前半になると小型方墳が造られなくなり、中小型の円墳のみが造られるようになる。後期後半になると、遺跡の南東側の標高50m付近でも小型円墳が築造される（V支群）。その後古墳の築造が停止すると丘陵平坦面で古墳群を避けて集落が造られる。

飛鳥時代になると標高30m付近の平坦面だけでなく、丘陵の最上部にも竪穴建物が複数建てられ、小規模な集落を形成する。遺跡の北側では境界溝により墓域と居住域を分ける一方、古墳の周溝の上に竪穴建物を建てる例が見られる。最初は墓域を意識して住居を建てていたが、周溝が埋まるような土地造成が行われた結果、墓域の認識が薄れ古墳上に竪穴建物が建てられたと考えられる。これまで、丘陵を墓域として利用していた集団が、古墳を破壊して居住域を広げたとは考えにくく、異なる集団が土地造成を行い居住した可能性がある。

奈良時代には、100棟以上もの掘立柱建物遺跡が建てられ、中には建物の主軸を北にそろえた建物群や庇付の建物、平成30年度の調査で検出した平坦面は、丘陵斜面を削った平地に掘立柱建物が建てられ一般の集落と様相が異なる集落である。

その後平安時代の建物跡や中世の陶磁器や瓦が出土していることから小規模な集落が存在していたと考えられる。

5. おわりに

一連の調査において、芝山古墳群は、37基以上の古墳からなる古墳群であること、古墳の分布が丘陵の広範囲に広がることが明らかになった。これまで、古墳時代前期末に築造された梅の子塚古墳1・2号墳を中心とした標高50mの丘陵上部の造墓活動が古墳時代中期後半になると停止し（II支群・IV支群）、標高30mの平坦面（I支群）に墓域が移ると考えられていたが、古墳時代後期においても丘陵上部で古墳が築造されていたことがわかり（V支群）、複数の集団が造墓活動を行った可能性が指摘できる。

また、南山城地域では古墳時代後期に入ると横穴式石室を採用する古墳が増加するが、芝山古墳群では久津川古墳群同様に木棺直葬を採用し続け、造墓活動に関しては保守的な思想を有していたと考えられる。

丘陵内で造墓活動が停止すると墓域を避けて竪穴建物からなる小規模な集落が形成されるが、飛鳥時代になると墓域の認識がなくなり、集落を営むための土地造成が行われる。奈良時代になり再び土地造成が行われると丘陵の広範囲で掘立柱建物が建てられるが、平安時代以降になると集落の規模が縮小していき、耕作地へ移行していく。

今後、発掘調査成果からの古墳群や建物群の変遷を明らかにし、より具体的な土地利用を明らかにしていきたい。

(すが・ひろえ=当調査研究センター調査課主任)

注 小泉裕司 1999「芝山古墳群」『城陽市史』第三巻 城陽市役所

参考文献

- 岡崎健一ほか 2004 「『京都府遺跡調査概報』第110冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
桐井理揮 2019 「—芝山古墳群からみた古墳時代の葬送儀礼—」ふるさとミュージアム山城文化財連続講座
資料 京都府立山城郷土資料館
桐井理揮 2020 「西山1・2号墳出土遺物の再検討」『同志社大学歴史資料館 館報』第23号 同志社大学歴
史資料館
小池 寛 1987 「芝山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第25冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター
小池 寛 2003 「城陽市芝山遺跡の土地利用について」『京都府埋蔵文化財情報』第89号 (財) 京都府埋蔵
文化財調査研究センター
小泉裕司 1995 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集 城陽市教育委員会
小泉裕司 1999 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第39集 城陽市教育委員会
小泉裕司 1999 「芝山古墳群」『城陽市史』第三巻 城陽市役所
近藤義行ほか 1978 「芝山遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集 城陽市教育委員会
(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2017 『芝山遺跡第16次 B・D地区現地説明会資料』
(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018 『芝山遺跡(第17・18次) 芝山古墳群(G・L地区) 現
地説明会資料』
(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018 『芝山遺跡(第17・19次) (I・M地区) 現地説明会資料』
(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2019 『芝山遺跡・芝山古墳群第19次 現地説明会資料』
(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2020 『芝山遺跡・芝山古墳群第20・21次調査 現地説明会資料』

京都府庁の煉瓦建物について(上)

井畠 良太・加藤 雄太

1. はじめに

本稿では、2018年から2020年にかけて調査が行われ、2021年8月に刊行された「平安京跡(左京一条三坊三町)発掘調査報告」で成果報告ができなかった煉瓦建物について紹介する。この調査では近衛大路の変遷や戦国時代の構えの一部が確認され、また近世後期の町屋構造、幕末の京都守護職の上屋敷遺構を検出するなどの成果があったが、近代の構築物に関しては明治6年に移転してきた中学校以降の報告が十分にできていない。このことから、報告していなかった近代の煉瓦建物に関して追加の報告を行いたい。当報告は2部構成で本稿は前半部にあたり、調査でみつかった遺物の報告を中心に行う。

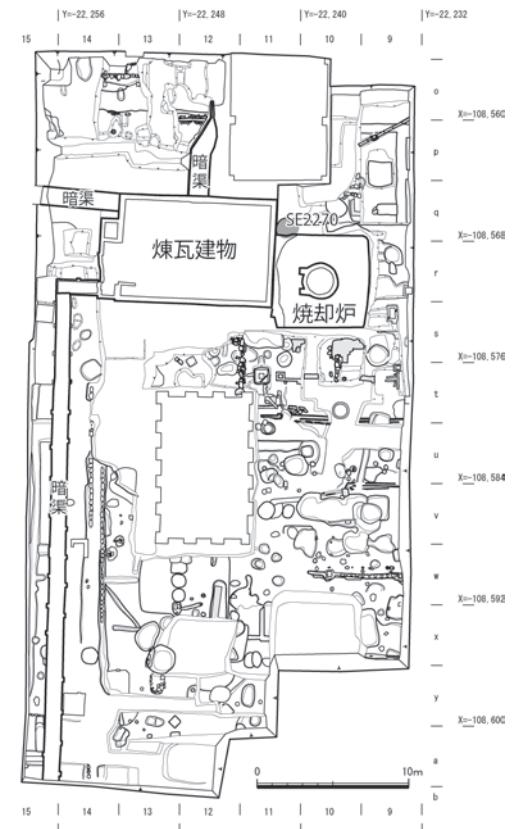
2. 平安京左京一条三坊三町の概要

調査地は平安時代以降、近衛大路の路面にあたり、幕末に京都守護職上屋敷が設置されるまで路面が維持されていた。江戸時代になると調査地には町家が立ち並んだが、嘉永7(1854)年の嘉永の大火にて焼失してから復興が進まず、文久2(1862)年に京都守護職の上屋敷が設置されることとなる。慶應3(1867)年に守護職が廃止され、跡地は一時期京都裁判所に引き継がれるなど、転々と役目をかえてきたが、明治2(1869)年に京都府庁、同6年に京都中学校、同18年に再び京都府庁の地となり、現代にいたっている。

今回見つかった煉瓦建物は遺構の切り合いや残されていた京都中学校の配置図から明治18年以降の京都府庁の建物と想定される。遺構は調



第1図 府庁と周辺地図
(京都市都市計画図 1/10,000)



第2図 遺構平面図

査地北半の東側に位置するコンクリート造りの焼却炉とその西側煉瓦組みのボイラ室と考えられる建物、そこから北と西および南に配管を通す煉瓦組みの暗渠からなる。北にのびる暗渠は調査地北にかかるコンクリート建物に接続する。西にのびる暗渠は位置からして府庁旧本館、南側は警備員の詰め所に接続していたと考えられる。(加藤雄太)



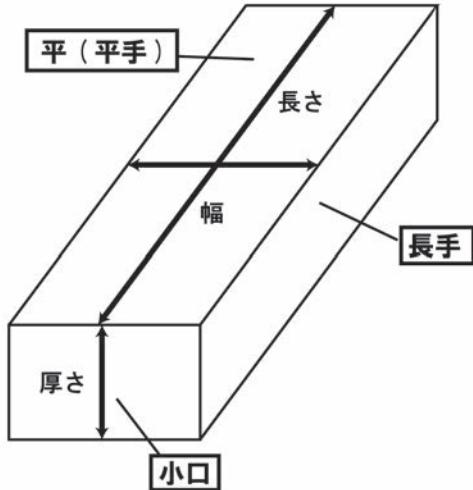
写真1 調査地北西部煉瓦建物の様子(北東から)

3. 出土した煉瓦について

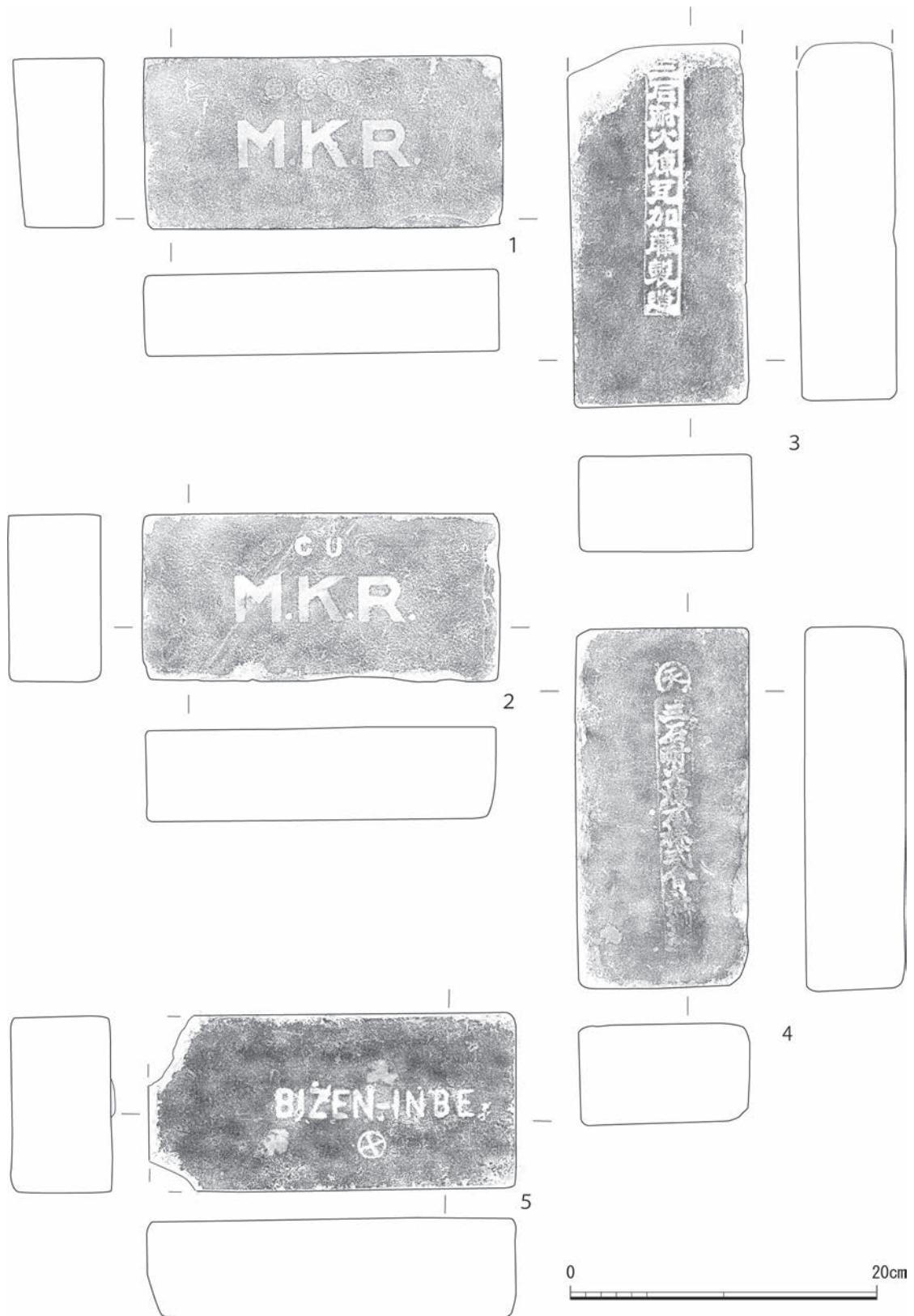
今回の調査で発見された近現代の遺構の中には、煉瓦遺構がいくつか確認され、それらの中では耐火煉瓦や赤煉瓦が出土している。前者は、溶鉱炉、暖炉などの建材として用いられている。後者は、建築物などに主に用いられている。

煉瓦は、直方体の形状をしており、長手、小口、平(平手)の3面を有する構造となっている(第3図)。第3図に示したように、長さ、幅、厚さで煉瓦の寸法が構成されている。

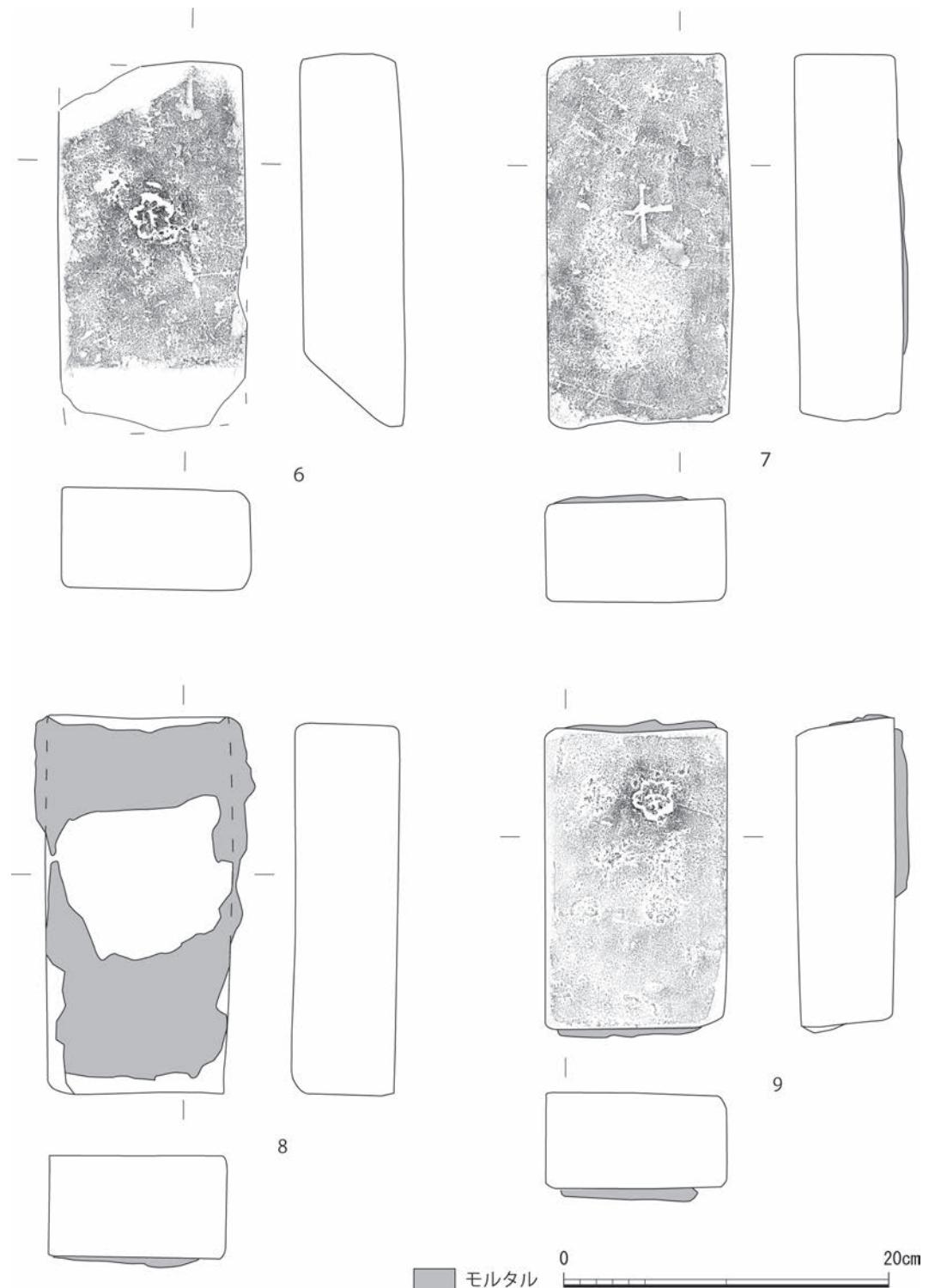
まず耐火煉瓦について説明する。今回は、耐火煉瓦(1～5)を全部で5点掲載した。これらの煉瓦は、焼却炉内で使用された煉瓦である。1・2では、「MK R」という刻印のある煉瓦が確認されているが、生産元については不明である。長手全体に煤が付着していたことより、ボイラ室の焼却炉に使用されていたことがわかる。1については、長手に煉瓦の焼成時に窯で煉瓦を積んだ際の痕跡(以下「積み痕」と呼ぶ)が見られる。2については、「MK R」の上に「cu」という刻印が押されている。3については、「三石耐火煉瓦加藤製造」の刻印があり、加藤耐火煉瓦会社の製品である。この刻印が使用されたのは出土遺構の年代や共伴遺物などより明治34(1901)年～明治39(1906)年と推定されている(中野2020)。4では、「○に天、三石耐火煉瓦株式会社製」の刻印が確認されている。この刻印は、明治25(1892)年に設立した三石耐火煉瓦株式会社で用いられたものであり、明治31(1901)年以降に使用されたものだと考えられている(中野2020)。5では、「BIZEN-INBE、○に×」という刻印が確認されている。生産元は不明であるが、



第3図 煉瓦名称図(井戸2019を修正)



第4図 平安京左京一条三坊町出土煉瓦 1

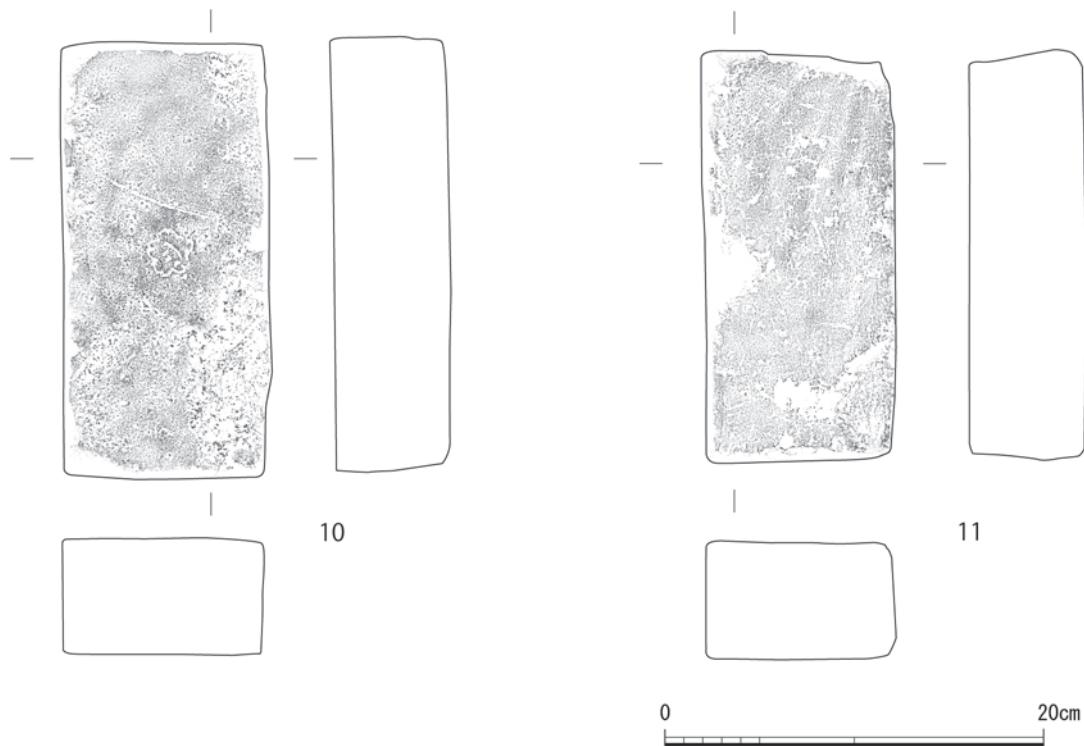


第5図 平安京左京一条三坊町出土煉瓦2

「BIZEN-INBE」というのは岡山の伊部付近で生産されていたものかと思われる。

今回掲載した耐火煉瓦には、一部を除いて岡山県の三石や伊部付近で生産されたものが多い特徴がある。

また、成形方法は、今回掲載した耐火煉瓦については打ち込み成形であると思われる。打ち込み成形とは、明治20年代に岡山県三石とその周辺で生まれた成形技法であり、型枠に材料を入れ



第6図 平安京左京一条三坊町出土煉瓦3

表1 出土遺物観察表

整理番号	出土遺構 / 出土地点	種類	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	刻印	成形方法	備考
1	焼却炉内	耐火煉瓦	230	110	51	MKR	打ち込み?	焼成時による「積み痕」あり、長手煤付着
2	焼却炉内	耐火煉瓦	227	108	57	CU、MKR	打ち込み?	上端モルタル残存、長手煤付着
3	焼却炉内	耐火煉瓦	227	111	58	三石耐火煉瓦加藤 製造	打ち込み	
4	焼却炉内	耐火煉瓦	230	110	63	○に天、三石耐火 煉瓦株式会社製	打ち込み	
5	焼却炉内	耐火煉瓦	235	113	63	BIZEN-INBE、 ○に×	打ち込み	「平の背面(刻印の押されていない面)」モルタル残存
6	煉瓦組建物	赤煉瓦	(224)	110	60	桜花にト	機械	
7	煉瓦組建物	赤煉瓦	220	110	58	十字紋	機械	モルタル残存する
8	煉瓦組建物	赤煉瓦	223	110	62		機械	モルタル残存する
9	煉瓦組建物	赤煉瓦	(180)	112	58	桜花にサ	機械	施工時による加工痕と思われる痕跡あり
10	煉瓦組建物	赤煉瓦	225	106	60	桜花にツ	機械	全面にモルタル残存する
11	煉瓦組建物	赤煉瓦	215	98	60		機械	

*寸法において目視で欠損があると判断したものについては()とした。

た後、木槌を用いて強く打ち込むことで成形される(中野2020、中野2021)。この成形技法は、後に関西にも普及したことである。

加えて、これらの刻印には耐火煉瓦によくみられる格子目が確認されていない。

次に赤煉瓦について(6~11)は、全部で6点掲載した。これらはすべて煉瓦建物で確認されたものである。6には、「桜花にト」という刻印が見つかっている。7には、「十字紋」と呼ばれる刻印が確認されており、関西で多く生産していた岸和田煉瓦の刻印「×」とも類似しているよ

うにみえるため、岸和田煉瓦の可能性がある。しかし、「×」は普遍的な刻印であるので、他の会社の刻印の可能性も捨てきれない。

9には、「桜花にサ」の刻印が確認されただけでなく、煉瓦の両端が削り取られていることから調整用の煉瓦として施工時に加工された痕跡だと考えられる。10には、「桜花にツ」の刻印が確認されている。6・8・10は、形状が非常に類似しているため、同一の会社印であると考えられるが、生産した工場については不明である。

なお、成形方法としては、機械によって直方体へと成形する機械成形のものが中心であり、今回掲載した煉瓦には粘土を型に入れて成形する手抜成形が確認されていない。(井畠良太)

4. 煉瓦建物(ボイラー室)と焼却炉について

赤煉瓦(6~11)が構成していた煉瓦建物であるボイラー室は検出時点ですでに上部構造が残存しておらず不明な点が多いが、そこからのびる暗渠は比較的良好な残存状況であった。調査では実測図等の詳細な記録を残せていないが、写真2から観察できるように、暗渠は両側面を煉瓦で組み上げ、上部を鉄筋コンクリートの蓋で覆っている。壁面を構成する煉瓦もモルタルで接着されており、また、内部の配管は暗渠の両側を跨ぐ梁から吊るされた、断熱材が巻かれた鉄管である。ボイラー室より北側にのびる暗渠は壁面も全てコンクリート製であったことから両者には時期差があり、北側のコンクリート建物を建てる際に増設された暗渠であると考えられる。

ボイラー室は煉瓦積みの壁面を有し、床面はコンクリートが打たれていた。調査では、この建物の下に戦国期の堀が残存していることがわかったため、煉瓦建物を除去している。この際に建物の下部構造が明らかとなった。床面のコンクリートの下には、厚さ数cmほどに薄く打ち割った幅20~30cm台の花崗岩を密に差しこみ、隙間を花崗岩の細片で充填する基礎構造が確認された。また、焼却炉は鉄筋コンクリート造りであるが、炉の下の土台は礫を多くませたコンクリー



写真2 調査地南半(北から)

トである。その下の基礎には河川由来の礫を敷き詰めた沈み込み防止措置が施されていることがわかった。このように炉の部分と土台部分には、コンクリートの混合比率を変えるなどの工夫がみられる。焼却炉の炉の内側に白煉瓦が使用され、本稿ではそのうちサンプリングとして回収した5点と、ボイラー室由来の6点の赤煉瓦を載せている。

写真3と4はそれぞれ調査地の北東側と北西側を写した写真である。調査はその都合で三度に分けて掘削が行われたため、分割した写真しかない。写真3では、焼却炉と煉瓦建物、そしてその床面にあたるコンクリート部分の露出が確認できる。焼却炉北西部と煉瓦建物の東側にみえる円形の構造は漆喰造りの井戸 S E 2270である。煉瓦建物がこれを避けて積まれていることから、建物構築時点では機能していた井戸であると考えられる。写真4では煉瓦建物の西半分が確認できる。建物からは北と西、南の方向に暗渠がのびている様子がわかる。建物の内側には土が堆積しているが、これは建物廃棄時に工事がおこなわれ、その際に出た余剰の土砂や産業廃棄物を投棄したものであると考えられる。

写真5は焼却炉の内部を写した写真である。鉄筋コンクリート製の外面に内部は耐火煉瓦をモルタルで接合した壁面を有する。内部には多量の煤や炭化物が堆積していた。



写真3 調査地北東部(上が東)



写真4 調査地北西部(上が東)



写真5 焼却炉(西から)

5.まとめ

今回は前後2編に分けて報告する前編(上)として、調査地の概要と出土遺物についてを中心に紹介した。後編(下)はこれに統いてこれらの遺物が構成していた煉瓦建物であるボイラー室についての論考とボイラー室が構築される時点で機能していたと考えられる漆喰造りの井戸から出土した遺物を合わせて報告する。

京都は多くの遺跡が見つかっている歴史の中心地である。こうした京都という地が、明治以降、社会が大きく変容していく中でどのように発展してきたのか。今回の報告は後編にも続くが、近代京都の発展を考える上で重要な事例となるのではないだろうか。

謝辞 第3章の執筆にあたっては尚美学園大学教授櫻井準也氏および舟山直希氏にご教示いただきました。

(いせ・りょうた=中央区教育委員会文化財調査指導員)

(かとう・ゆうた=当調査研究センター調査員)

参考文献

加藤雄太 2021 「平安京（左京一条三坊三町）」『京都府遺跡調査報告集』第182冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

井畠良太 2019 「第4章 建物の仕様および諸調査 第3節 煉瓦積 3. 使用煉瓦」株式会社文化財保存計画協会編『重要文化財慶應義塾図書館保存修理工事報告書 本編』学校法人慶應義塾 pp.84-87

中野光将 2019 「明治時代初期の耐火煉瓦の成形方法について—伊勢勝白煉瓦製造所を中心に—」『東京考古』(37) 東京考古談話会 pp.107-115

中野光将 2020 「出土事例からみる三石系耐火煉瓦の生産と流通—考古学的視点からみる耐火煉瓦の研究—」『東京考古』(38) 東京考古談話会 pp.103-119

発掘調査からみた近世民家 成立に関する事例紹介

桐井理揮

1. はじめに

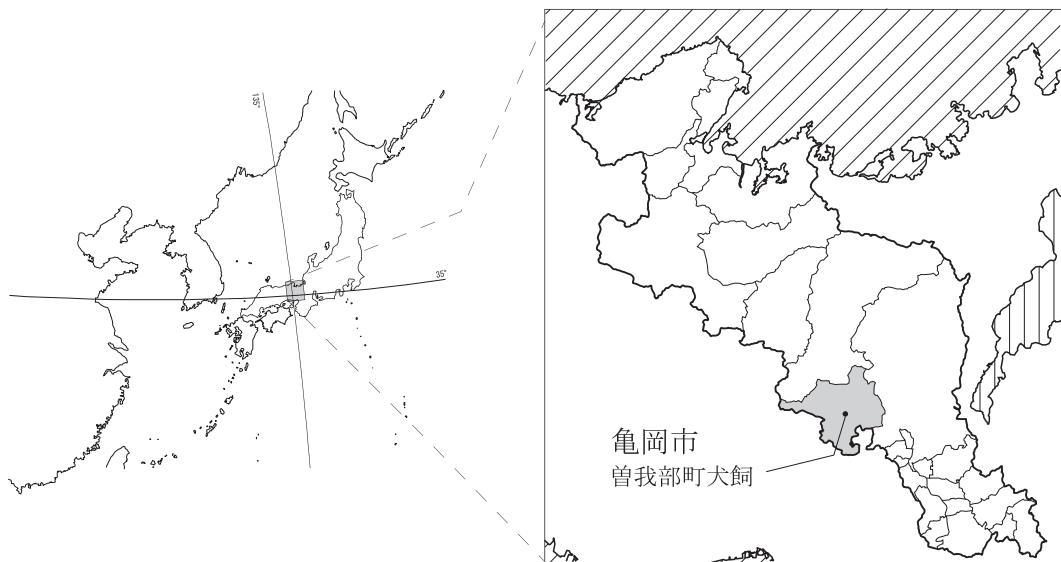
亀岡市曾我部町に位置する犬飼遺跡では、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」に伴い平成30年度から発掘調査が実施され、今年度末に報告書が刊行予定である。^(注1)発掘調査では堀に囲堀された13世紀末～14世紀前半の居館が検出され、報告書では開発領主など地元の有力者の居館と評価した。区画②で検出した掘立柱建物 S B 433は、いわゆる中世総柱型建物とは異なるやや特殊な構造であり、類似する構造の建物の検出例はあまり多くない。しかし、報告書作成過程で関連分野も含めて調査を行う中で、民家建築に類似する構造が存在することを知った。さらに、絵画資料の中にも類似する構造が認められるという。

これらの周辺分野は筆者にとって不案内の分野ではあるが、考古学と建築史学、あるいは文献史学の接点になりうる事例と考え、2・3の事例紹介を行い、覚書としておきたい。

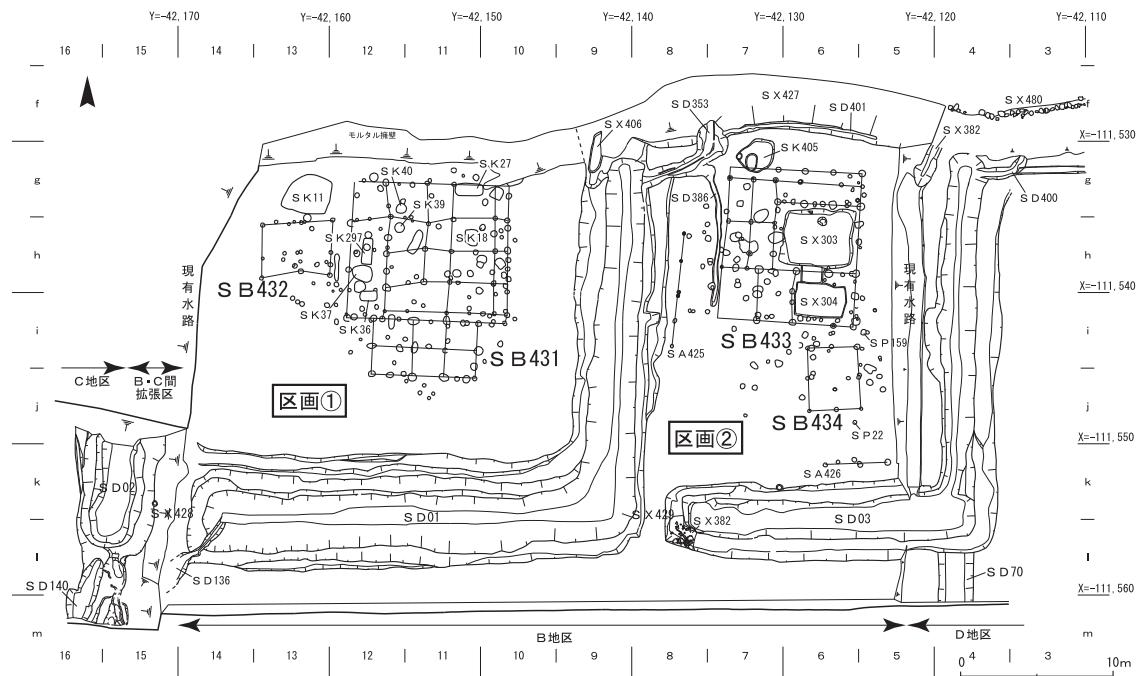
2. 犬飼遺跡の建物遺構

犬飼遺跡の調査では、中世の建物は区画①と区画②でそれぞれ大小2棟ずつ復元した。調査区内での柱穴の重複は少なく、柱の据替や小規模な増・改築などはあったと考えられるが、何度も建物が建て替えられたような状況は想定しがたい。

掘立柱建物 S B 431は、梁間4間・桁行4間を測る総柱建物で、東側に1間分の軒か縁と考えられる構造を持つ。北東隅は攪乱のため検出できていない。南側には3間×2間分の張り出し部



第1図 犬飼遺跡の位置

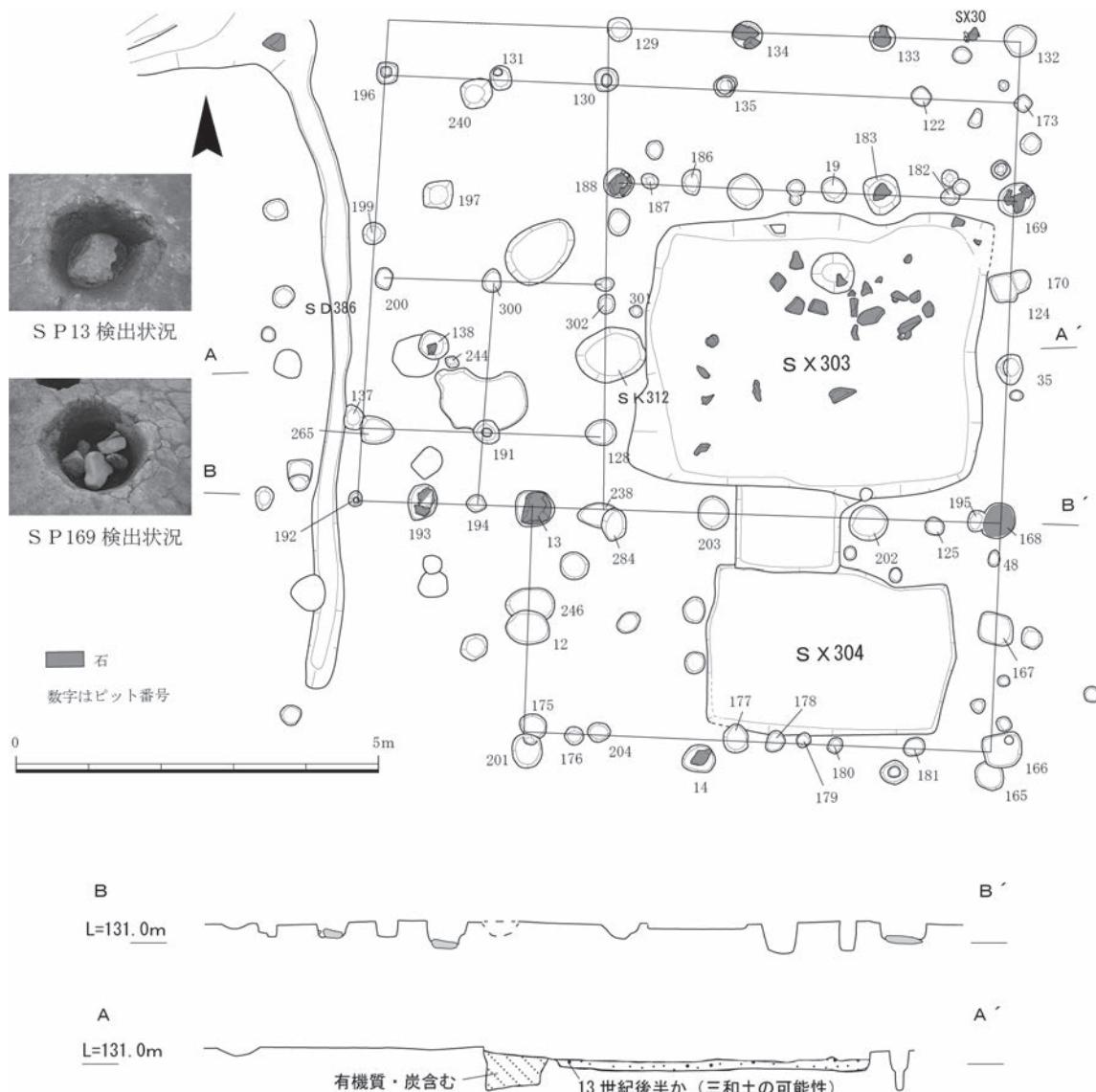


第2図 犬飼遺跡B～D地区(中世面)遺構配置図(1/500)

をもつ。当初この張り出し部は別の建物の可能性も考えたが、北の主屋部と柱穴を共有しており、それぞれが独立の建物と考えるよりも1棟の同じ建物と考える。したがって、張り出し部は入口の庇のような構造か第6図①のような建物と考えられる。西側1間分は柱筋の乱れがあり、土坑状の掘り込みも多く認められたため、土間の可能性もある。平面規模は約120m²である。

掘立柱建物SB433は、梁間5間・桁行4間で、南側には1間分、軒あるいは縁と考えられる構造を持つ(第3図)。南側には3×2間分の張り出し部をもつ。平面規模は約85m²である。建物中央部では竪穴状遺構SX303を、張り出し部では竪穴状遺構SX304を検出した。これらの竪穴建物は周囲の柱跡と切り合い関係が認められないことから、竪穴状遺構SX303を取り囲むように上屋構造が存在したと考えられる。なお、掘立柱建物SB433の柱痕は根石・栗石を持つものが多く、掘立柱建物でありながら礎石建物のように、より堅牢な上屋構造を持つ建物の存在が想定される。

竪穴状遺構SX303はSB433内部で検出した、1辺約4.5m、深さ0.3mを測る竪穴状の遺構である。掘立柱建物SB433の柱穴との切り合いではなく、床面にも柱穴の痕跡等は認められないため、建物の内部構造と考えられる。西辺中央部に直径0.8m、深さ0.5mの焼土土坑SK312があり、床面付近には焼土が認められたことから、建物に伴う火処であろう。竪穴状遺構SX304は、掘立柱建物SB433の南東隅で検出した、東西3.3m、南北2.3m、検出深0.15mを測る、長方形の竪穴状遺構である。北側に段が付き、スロープ状となっている。埋土中から顕著な遺物は出土していない。先述の竪穴状遺構SX303と類似する構造だが、屋内に存在する馬屋である可能性を指摘しておきたい。^(注2)

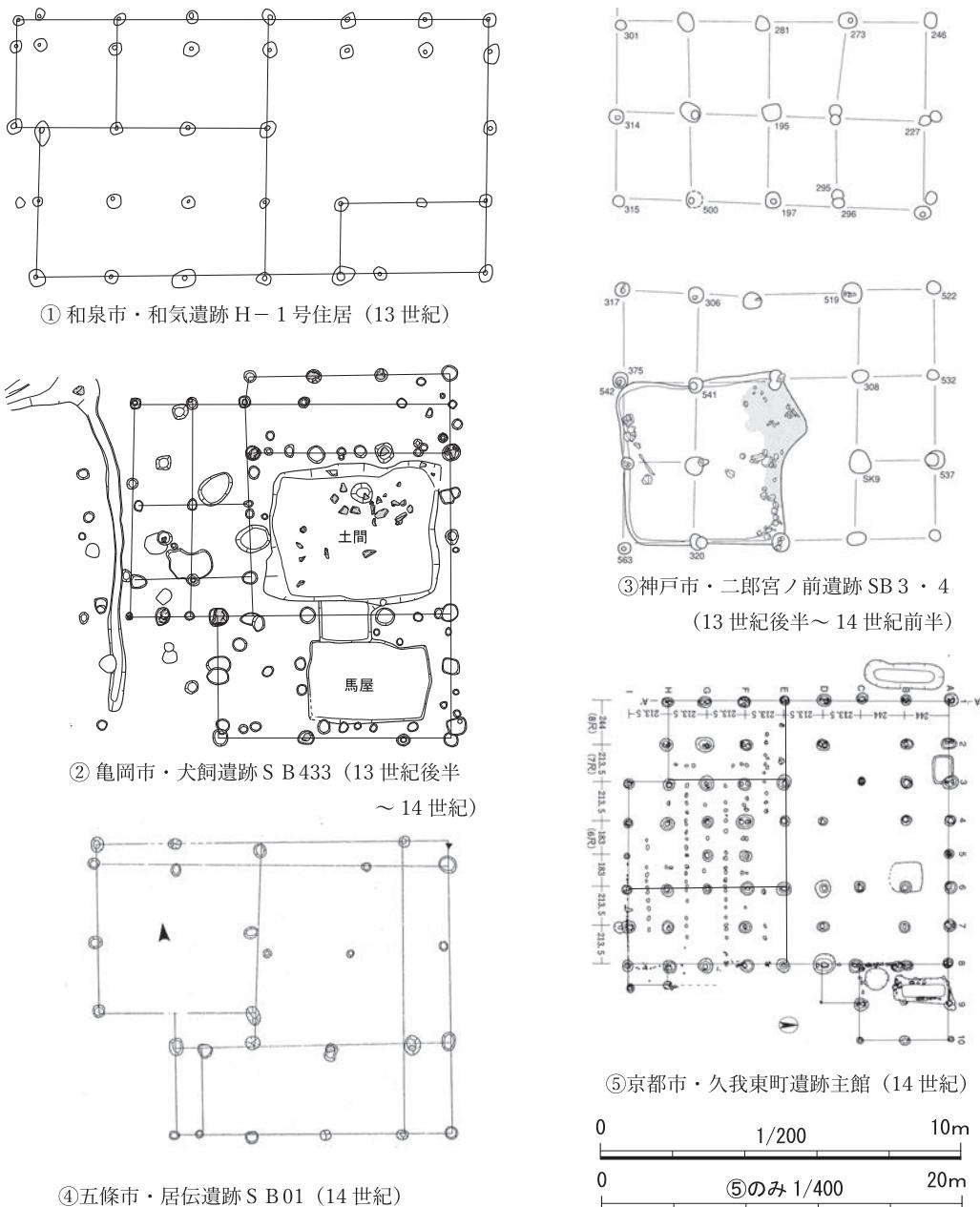


第3図 掘立柱建物 S B 433平・断面図

3. 類例の提示と若干の検討

(1)周辺の発掘調査事例から

中世の掘立柱建物については宮本長二郎が体系的に整理をしており^(注3)、梁間一間型と中世総柱型の2類例がみられることを指摘している。梁間一間型建物は弥生時代以降存在する小型の掘立柱建物が中世になり顕在化したものとされ、主に岡山県以西と関東・東北地方で主流となるという。中世総柱型建物は平安時代後期に出現し、近畿から北陸を中心に展開する。南北朝期には屋内柱の省略が始まり、同時に総柱身舎の外廻りに庇を設ける例が出現する。16世紀以降に省略本数が増え、近世民家的な間取りが成立すると説明されているが、室町時代の遺構は少なく、近世民家への発展は検討課題とされた。犬飼遺跡の建物は、中世前期に普遍的に認められる平面形状が矩形の総柱型建物ではなく、やや特異な構造をしている。上述のことを踏まえ、近年調査された事例を中心に、周辺地域での発掘調査事例での類例を確認していこう。



第4図 犬飼遺跡 S B 433と類似する構造の建物(1/200、1/400)

和氣遺跡H-1号住居は方形居館の一角で検出された建物で、東半の一部に柱の省略がみられる。掘り込み構造としての土間や馬屋は検出されていないようだが、後述の箱木家と近い平面型式が想定されている。^(注4)

二郎宮ノ前遺跡は、神戸市北区の居館に伴う遺跡で、総柱型建物のうち1棟に、犬飼遺跡と同じような竪穴状の窪みを持つ建物が検出されている。その埋土中からは焼土等が検出されており、使用時から建物内部に土間のような掘り込みがあったことを示す一例といえる。^(注5)

京都市久我東町遺跡は京都市伏見区の遺跡で、14世紀の居館関連遺構が検出されており、内部空間に仕切りのある大型建物が検出されている。北半は一部柱が省略され、焼土や水甕の据え付け穴とみられる遺構が検出されていることから、土間と考えられている。北東隅には2間×2間の馬屋とみられる張り出しがあり、犬飼遺跡S B 433との共通点が認められる。^(注6)

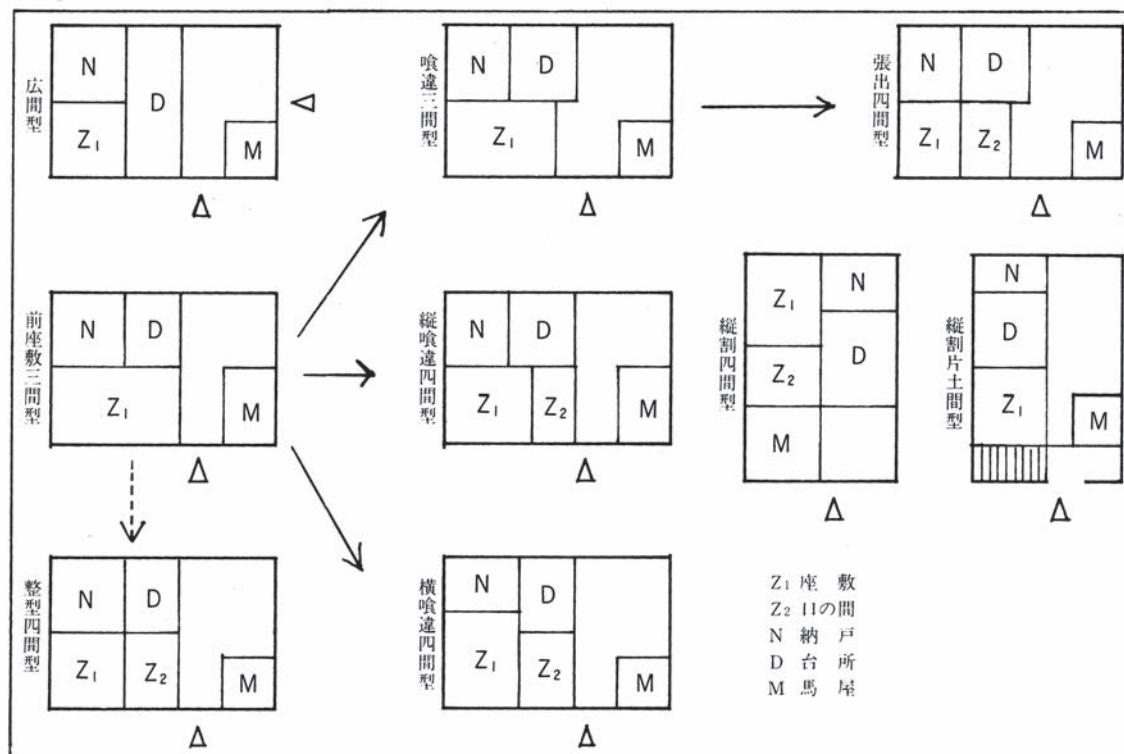
居伝遺跡は堀で囲まれた14世紀の居館で、犬飼遺跡 S B 433と平面プランが酷似する建物が検出されている。屋内に掘り込みや土坑ではなく、屋内柱が省略された3室をもつ建物と報告されているが、あるいは東半は土間のような空間である可能性もある。^(注7)

以上のように、現在でも中世後期の建物の良好な検出事例は少ないことに変わりはないが、13世紀にはほぼ長方形を志向していた建物が、14世紀代には多様な平面形状の建物が出現し始めるということが分かる。それらでは根石を持つ柱穴が増加しており、屋内柱の省略と期を一にした現象と考えられる。なお、ここで提示した事例はすべてが地域の有力者の居館と考えられている遺跡である。その居館の内部では、最大規模の建物として一回り大型の総柱型建物があり、それとは別に先述のやや特異な構造の建物が存在する。したがって、居館の中で最も格式高い建物というわけではないという点には注意しておきたい。

(2) 現存民家の事例から(第6図)

以上のように、地域の有力者層の居館と目される遺跡で、犬飼遺跡と同じような構造の建物が散見されることを確認した。次に、現存民家にみられる構造との類似点を整理していきたい。居館の建物と一般村落の大型建物の構造が類似することはすでに指摘されており、地域の有力者の居宅であっても農村でみられるような建物との比較は有効と考えるためである。なお、民家の間取りの展開過程は第5図のように整理されており、中世後期には前座敷三間型が近畿で成立し、^(注8)中世後半から近世初頭には地域型が発現するとされている。^(注9)

神戸市北区の箱木家は、築造年代が14世紀代に遡ることが柱材の年代測定の結果明らかにされている現在最古の民家である。^(注10) 平面形状は前座敷三間型である。また、成立年代は不明ながら近



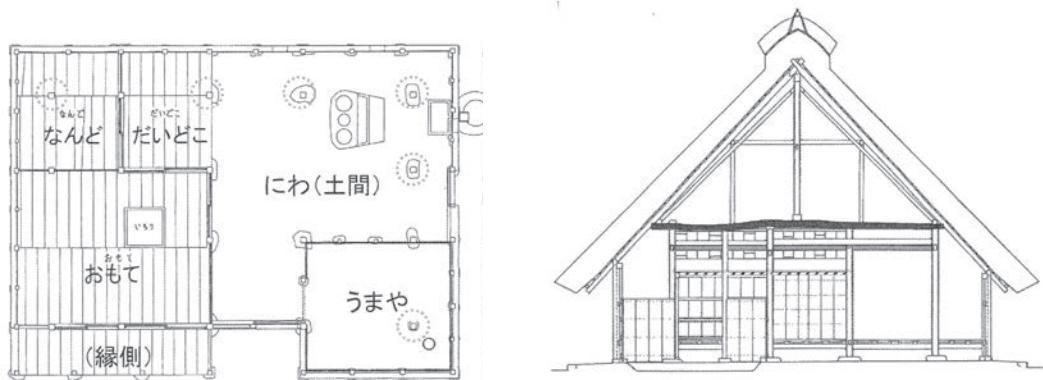
第5図 民家の平面形態の変遷(宮本1990)

接して一回り小さい付属屋が認められることは、犬飼遺跡で検出された建物との共通点として指摘できよう。柱の配置は省略が少なく、礎石立ちということを除くと発掘事例から総柱型建物と区別して類似する構造を想定するのはやや難しいかもしない。

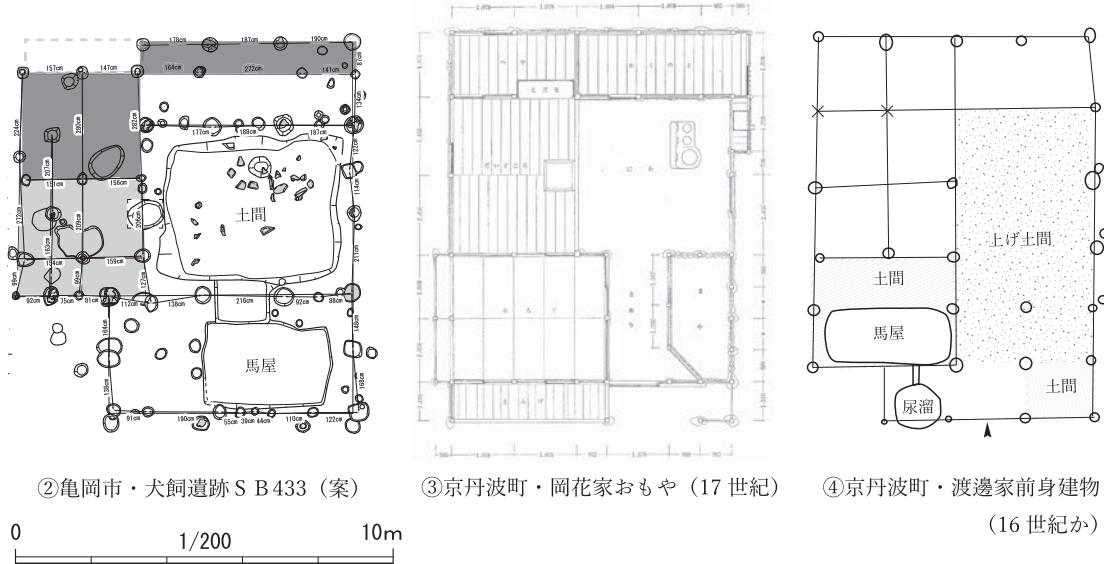
亀岡盆地周辺では、前座敷三間型民家を祖形として、摂丹型民家という縦割片土間型の民家が成立する。摂丹型民家の分布地域は、室町時代後期の管領細川氏の支配領域と合致しており、その成立は中世後期に遡ることが想定されている。そして、名主・地侍層が在地支配の末端機構として村落社会の上位に位置付けられた結果、地域社会で共有されたと考えられている。^(注11)

現存最古級の摂丹型民家の遺構とされている岡花家では、摂丹型の特徴である縦割型を採用しつつも、土間の奥に室を設けるなど、それ以降の摂丹型には引き継がれない特徴も持ち、古い形式を残している可能性がある事例である。17世紀の北船井型住居の遺構として知られる渡辺家では、建替修理の際に下層の前身建物の発掘調査が行われており、岡花家と同様、奥の間とみられる空間が見つかっている。^(注12) このように、亀岡盆地周辺では、近世初頭以前となる可能性が高い民家が縦割型で、片土間で土間の奥に室を設ける例があることに注目したい。

これらの事例を参考に、犬飼遺跡 S B433に再度立ち戻ると、平面形状は14世紀代とされる箱木家との共通点が多く指摘することができる。一方で、間取りや土間の奥に室を設けるという点



①神戸市・箱木家おもや（14世紀か）○は独立柱



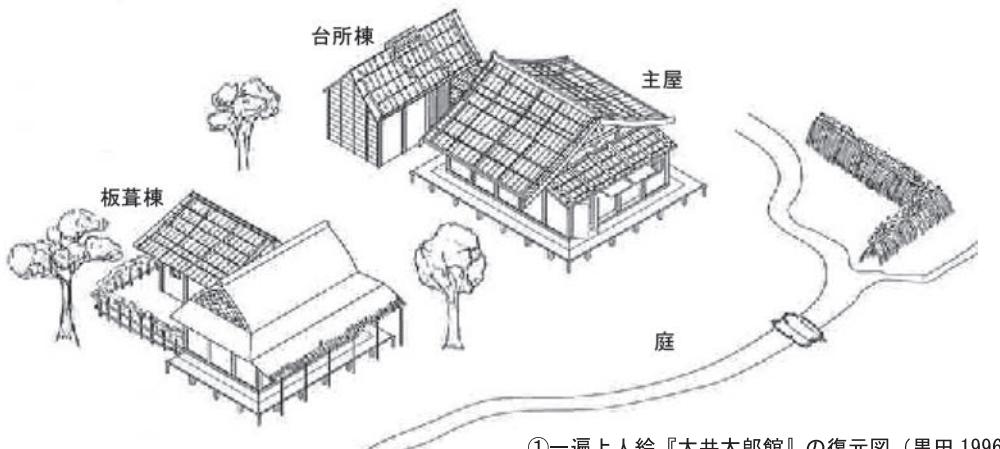
第6図 中世～近世前期の民家の平面形の諸例

においては、近世初頭以前の摺丹型民家との共通点も見出すことができる。もちろん、確実に中世に遡る民家の事例が少ない以上、現存民家との型式的ヒアタスは大きく、直接接続させることには慎重である必要があるが、近世民家との接点を探りうる資料として問題提起しておきたい。^(注13)

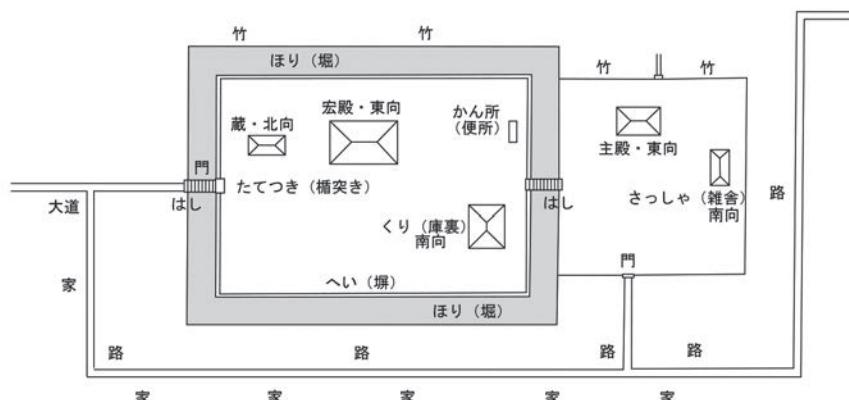
(3) 文献・絵画資料から(第7図)

最後に、文献及び絵画資料の事例を2、3示しておきたい。まず、『一遍上人絵伝』に描かれた信濃国の武士・大井太郎の館の例を見てみよう。大井太郎の館では、板葺の建物と茅葺の建物が並んで描かれており、その屋敷は溝で区画されている。玉井哲雄の研究によると、板葺きと茅葺きの建物が並立する構造に復元することができるという。^(注14) それぞれには小型の屋も付属する。また、15世紀の事例ではあるが、『東寺百合文書』には、備中国新見庄の莊園政所指図として、堀で囲まれた空間に客殿と主殿が並んで描かれている。犬飼遺跡でも、同様に総柱型掘立柱建物と民家と共通点の多い2棟の建物と、それぞれの付随建物があり、構成は類似している。想像力をたくましくするならば、犬飼遺跡の区画①の総柱型建物S B431は客殿、民家と共通点の多い区画②の掘立柱建物S B433は普段使いの主殿であったことも想定可能であろう。

以上の2例から、地域の有力者の居館にも構造を異にする2種の建物が並存することは一般的であったと考えて大過ない。本論のように、居館の発掘調査事例から近世民家への道筋を検討することはあながち無意味ではないといえる。



①一遍上人絵『大井太郎館』の復元図（黒田 1996）



②『東寺百合文書』備中国新見庄莊園政所指図の翻刻

第7図 文献・絵画資料の居館建物の構成

4. おわりに

犬飼遺跡の調査事例を足掛かりに、近世民家成立について示唆的と考えられる事例を2、3提示した。体系的に議論を行ったわけでも、悉皆的に資料整理を行ったわけでもないが、中世の遺跡の発掘調査で得られた成果が、地域に現存する近世の建物遺構の前身となった可能性は十分考えられても良いだろう。多方面からの批判を得、今後議論が深まるることを期待したい。

なお、報告書作成過程で、奈良文化財研究所箱崎和久氏、京都府教育庁島田豊氏、村田典彦氏に類例をご教示頂いた。記して感謝申し上げる。

(きりい・りき=京都府教育庁指導部文化財保護課主任)

- 注1 (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2022『京都府遺跡調査報告集』第185集
調査成果の詳細については当文献を参照頂きたい。
- 注2 箱崎譲治 2010『馬小屋の考古学』高志書院 なお、S X 303についても、S X 304と一連の遺構と考え、
掘立柱建物 S B 433自体を単独で存在する馬屋と捉えることもできようが、区画②は馬屋だけが存
在する空間となるため、本論では別の機能をもつものとして復元した。
- 注3 宮本長二郎 1999 「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間－関口欣也先生退官記念論文集』関
口欣也先生退官記念論文集刊行会
- 注4 宮本長二郎 1990『日本の美術』第288号 民家と町並 近畿 至文堂
- 注5 渡辺昇・山上雅弘・篠宮正・山本誠 2001『二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報
告書第220冊 兵庫県教育委員会
- 注6 長宗繁一 1993「久我東町遺跡の主館」『平安京歴史研究 杉山信三先生米寿記念論集』杉山信三先生
米寿記念論集刊行会
- 注7 本村充保 2000『居伝遺跡』奈良県橿原考古学研究所調査報告第79冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 注8 山上雅弘 2006「掘立柱建物」『中世城館の考古学』高志書院
- 注9 前掲注3文献と同じ
- 注10 今村峯雄・中尾七重 2007「民家研究における放射性炭素年代測定について（その2）重文閑家住宅・
重文箱木家住宅・重文吉原家住宅の事例」『国立歴史民俗博物館研究報告』137
- 注11 永井規夫 1975「摂丹型民家の形成について」『日本建築学会論文報告集』第251号
- 注12 永井規夫 1975『京都府の民家』京都府教育委員会、下村修・益田兼房 1974『重要文化財旧花岡家住
宅移築修理報告書』大本本部建設事務局、下村修・益田兼房 1978『重要文化財渡邊家住宅修理工事
報告書』京都府教育委員会、山之内誠 2021「中世民家としての千年家」『BanCul』No.118、公益財
團法人姫路市文化国際交流財団
- 注13 新潟県村上市では、16世紀の摂丹型民家と共に構造の建物が検出されている。(中尾七重 2012「古
渡路遺跡の中世掘建柱建物について－架構等の復元とその特徴－」『文化学園大学紀要』服装学・造
形学研究43 文化学園大学)
- 注14 玉井哲雄 1996「武家住宅」『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会
- 注15 「備中国新見庄地頭方百姓谷内家差図」『東寺百合文書』サ函399号(東寺百合文書WEB <http://hyakugo.kyoto.jp>)

城陽市芝山遺跡からみた久津川古墳群

小池 寛

1. はじめに

昭和39(1964)年、京都府城陽市富野に所在する長池古墳の発掘調査が実施された。その調査によって正確な墳丘測量図が作成されるとともに、2基の埋葬施設から古墳時代後期の須恵器や鉄器・玉類などの副葬品が出土した。その後に刊行された報告書において「前方後円」形を呈する墳丘であることが記述され、埋葬施設の検出面で土師器や櫛齒文を主文とする国産の小型鏡の出土が報じられた。^(注1) その後、土師器や小型鏡の出土状況の検証は行われず、古墳時代後期の国産小型鏡として認識されるようになるとともに、墳形についても古墳時代後期の前方後円墳で著名な大和二ツ塚古墳との比較により、後期の前方後円墳とする解釈が一人歩きすることになる。^(注2)

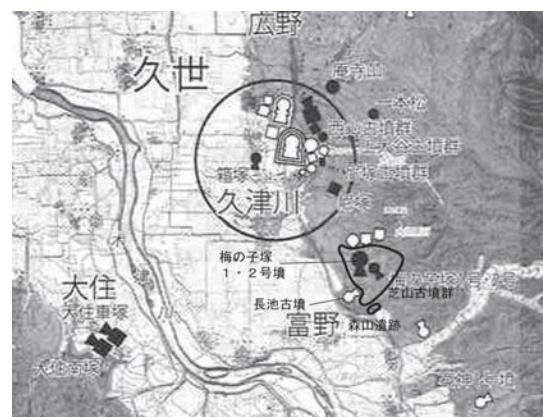
長池古墳の発掘調査から20年が経過した昭和59(1984)年、宇治市太陽が丘運動公園へ通じる府道建設に伴い長池古墳に近接する丘陵に所在する芝山遺跡(芝山古墳群)において初めての面的調査を筆者が担当した。その調査により5世紀末の低墳丘方形墓や6世紀代の木棺直葬を埋葬施設とする円墳からなる群集墳を検出した。^(注3) その後、芝山遺跡では府道や市道、そして、現在も調査中の新名神高速道路建設に伴う発掘調査により数多くの低墳丘方形墓や古墳が検出されており、昭和59年当時とは比較にならない程の新知見が数多く得られている。

一方、京都府南山城地域を代表する城陽市久津川古墳群は、大正4(1915)年に久津川車塚古墳で不時発見された長持形石棺の緊急調査に端を発し、昭和時代の市街化に伴う調査により、支群の認識と各古墳の築造時期の特定が急速に進展することとなる。特に、和田晴吾が昭和63(1988)年に著した「南山城の古墳」^(注4)によって久津川古墳群の範囲が、先に述べた長池古墳から宇治市丸山古墳を範囲として捉えられ、その後の研究に大きな影響を与えた。それ以後、各支群の年代設定などが小泉裕司^(注5)により進められ、南山城地域の古墳時代の動向が広く認識されるようになった。

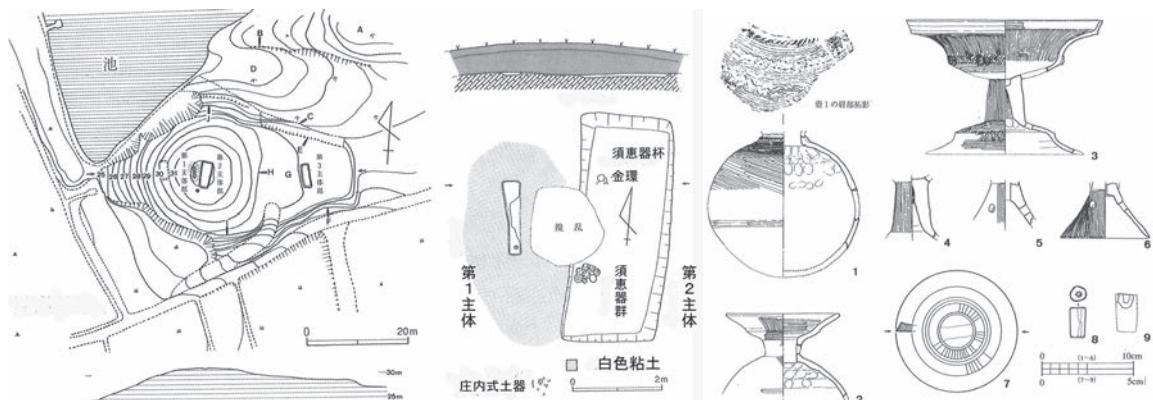
本稿は、近年、芝山遺跡地内で新発見の古墳が急増している状況から、あらためて芝山古墳群の成立とその背景について検討するとともに、久津川古墳群の概念を見直し、両者の関係性について私見を述べることを目的としている。

2. 新発見が相次ぐ芝山遺跡について

芝山遺跡は、久津川車塚古墳から南東約2kmの丘陵上に位置する複合遺跡である。近年の発掘

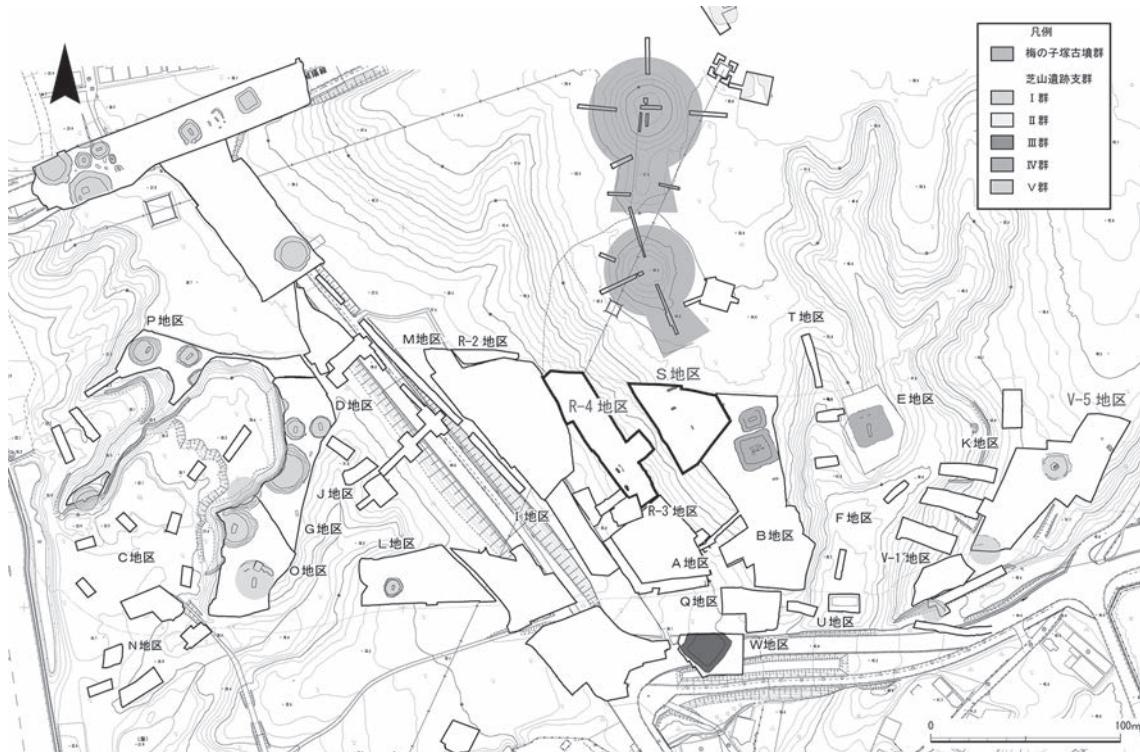


第1図 久世・富野・大住の首長墓



第2図 長池古墳(右は墳頂部の拡大)

第3図 長池古墳出土遺物



第4図 梅の子塚古墳群及び芝山古墳群

調査により、当初、設定された遺跡の範囲を拡大する必要が生じている。また、以降に述べる長池古墳や森山遺跡についても、梅の子塚古墳群や芝山古墳群の成立に大きく係っていることから、芝山遺跡の範囲に含める必要が考古学的には生じていると考えている。

本稿では、芝山遺跡地内で確認される数多くの古墳を芝山古墳群として呼称し、同遺跡地内にある2基の前方後円墳は、従来通り梅の子塚古墳群と呼称する。ここでは、それらの遺跡や古墳と芝山遺跡が、歴史的に非常に深い関係性があることを前提とし、その概要について述べていくこととする。

芝山遺跡地内において最初に首長墓として築造された長池古墳は、芝山丘陵の南西端に所在する。残念ながら現在もなお、古墳時代後期の前方後円墳として認識されているが、昭和62(1987)年に筆者が行った出土遺物の再整理により庄内期に築造されたことが判明している。築造当初の墳形については、墳丘の北辺・東辺・南辺に直線的な等高線が見られることから、一辺25mの方

墳であった可能性が高いと考えている。しかし、古墳時代後期に墳墓として再利用する際、^(注7)円墳を意図した整形が行われている。

一方、芝山遺跡での昭和59(1984)年の調査では、古墳時代前期の布留1式に比定できる古式土師器を含む竪穴住居跡が検出されており、また、採集資料としての庄内式土器や残存状況が非常に悪い布留式併行期の竪穴住居跡が1基確認されている。古墳時代中後期以降の土地利用によって、古墳時代前期の集落が削平されていることをこれらの遺構・遺物は示唆している。

4世紀後半の古墳時代前期には、粘土櫛を埋葬施設とする全長87mの前方後円墳である梅の子塚1号墳と全長65mの前方後円墳である梅の子塚2号墳が築造される。一方、芝山遺跡が所在する標高35mの丘陵南端には森山遺跡が所在している。4世紀後半に比定できる古墳時代前期の東西40m、南北32mの方形壇が確認されている。方形壇の周囲には幅4m、深さ1.5mの周溝がめぐり、方形壇の上縁には数多くの柱状の小穴が検出されており、防御施設を想定できる。また、周溝の南西隅では、高杯や小型丸底土器などの古墳時代前期に比定できる布留式土器が集中して出土しており、何らかの宗教的儀礼が行われているようである。さらに、この方形壇を取り囲むように同時期の竪穴住居群が確認されており、時期的に梅の子塚古墳群を築造した造墓集団の集落と解釈でき、方形壇自体、梅の子塚古墳群の被葬者が住まう首長居館と考えられる。^(注8)

その梅の子塚古墳群の周囲に築造された古墳群が芝山古墳群である。芝山古墳群が所在する丘陵は、梅の子塚古墳群が位置する標高50mの上位丘陵と標高30mの下位丘陵に分けることができる。概して、梅の子塚古墳群に近い上位丘陵には5世紀を中心とする一辺20mの低墳丘方形墓が築造され、下位丘陵には、5世紀末に比定できる一辺10mの低墳丘方形墓や6世紀代の直径10~20mの低墳丘円形墓や円墳、土壙墓などで構成される群集墳が築造される。上位段丘の低墳丘方形墓には、首長を補佐していた集団の首長が葬られたと考えられ、それを傍証するかのように中国製方格規矩鏡が出土している。

次に、下位丘陵に築造された群集墳について、考えておきたい。

古墳時代前期の畿内政権は、各地域を直接的に支配する軍事力や経済力を有するには至っておらず、各地域を支配する地域首長に各々の地域支配を委ねた。その頃、中国における政治的な動乱から難を逃るために技術や知識をもった渡来人である「今来才人」が、日本国内に渡来する。彼らの知識や技術は、畿内政権に土木技術や鉄生産など実にさまざまな新しい技術をもたらした。それにより畿内政権は、徐々に各地域を直接的に支配できる軍事力や経済力をもつようになる。一方、「今来才人」は、地域首長の統治を受ける各集落にも参入し、集落の統廃合や独自の交易

などにより農業生産量の増大や交易圏の拡大とともに灌漑・治水、鉄生産などの技術力が急激に発展する。このように畿内政権の経済的・軍事的基盤の安定と各集落の生産力の向上は、もはや、その中間に存在する地域首長を必要とせず、それまで維持された「畿内政権—地域首長—各集落」という政治体制から「畿内政権—各集落」へと変貌を遂げた。結果、5世紀末から6世紀初期に各地域から一斉に地域首長墓である中規模前方後円墳が、消失することとなる。

一方、6世紀前半になると、畿内政権は巨大化した集落の直接的支配を行い、凡日本的に大規模集落の解体が政治的に行われる。それにより血縁関係あるいは擬制的同族関係にある有力家族が出現し、家族墓としての群集墳が成立することとなる。芝山古墳群で確認された6世紀前半以降の群集墳は、このような支配構造の激変を如実に反映しているのであろう。一見すると上下丘陵の古墳群は同質のように思えるが、築造の背景は大きく異なっている。

以上、見てきたように、芝山遺跡地内には、庄内期の方墳である長池古墳が築造され、その後、首長系譜を引く2基の前方後円墳である梅の子塚古墳群が築造される。一方、森山遺跡では、首長居館である方形壇と集落が造営される。また、梅の子塚古墳群の周辺には、首長を補佐した人々を埋葬した低墳丘方形墓群が築造され、6世紀には有力家族墓である群集墳が築造されるなど、古墳時代全般を通してさまざまな営みが確認できる希有な遺跡である。

以上のように芝山遺跡で得られた新所見は、久津川古墳群の範囲や関係性についても再考を促す結果となっている。次に、芝山遺跡を基層として、久津川古墳群について、考えていきたい。

3. 首長墓の出現とその系譜

古墳時代前期にあたる庄内期の首長墓は、弥生時代の方形周溝墓の系譜上にある方墳あるいは前方後方墳が築造される事例が多い。一方、古墳時代前期の首長墓は、方墳や前方後方墳が築造される地域と、円墳あるいは新たに出現する前方後円墳が築造される地域に分けることができる。方墳や前方後方墳が首長墓として最初に築造される地域は、周囲に肥沃な可耕地が広がり、弥生時代以降、安定した農業生産力をもった在地勢力の自立的な発展が背景にある。一方、周辺に可耕地が広がらない地域では、在地勢力の発展もさることながら、畿内政権との政治的な結び付きにより前方後円墳や円墳が首長墓として築造されることとなる。城陽市域に所在する古墳群に限って概観すれば、庄内期の墳墓が築造される古墳群として、上大谷古墳群、芝ヶ原古墳群、そして、先に述べた芝山古墳群に限定できる。ここでは、議論し尽された感があるが、改めて久津川古墳群について、見ておきたい。

久津川古墳群は、大谷川によって隔てられた南北の丘陵上に所在する古墳群と大谷川の扇状地に築造された古墳群に分けることができる。まず、大谷川の北方に位置する上大谷古墳群について概観しておきたい。

(1) 上大谷古墳群

上大谷古墳群では、木棺直葬を埋葬施設とする $11 \times 15m$ の方墳である上大谷6号墳が築造され、次いで $9.5 \times 16m$ の方墳である同7号墳がいずれも庄内期に築造される。上大谷古墳群には円墳

である13・16号墳も築造されるが、基本的には方墳と前方後方墳が6世紀初頭まで築造される。後述する芝ヶ原古墳群のように広い扇状地形に面した丘陵には築造されておらず、閉塞された丘陵を墓域としている。なお、上大谷古墳群が所在する丘陵先端域には西山古墳群が所在している。特に、西山1号墳は上大谷8号墳と同じく古墳時代前期に築造された全長82mの前方後方墳である。両古墳群は、異なった尾根上に築造されていることから複数のグループからなる同一造墓集団による築造と捉えることができる。次に、大谷川の南方丘陵の様相についてみていくたい。

(2) 芝ヶ原古墳群

大谷川の南方丘陵に築造された芝ヶ原古墳は、庄内期に築造された木棺直葬を埋葬施設とする全長27mの前方後方墳である。墳頂部では破碎供献された庄内式土器が出土し、埋葬施設から四獸形鏡や銅釧、多量の装身具が出土した。^(注9) 芝ヶ原古墳群では4世紀末まで首長墓の築造は見られず、直径35mの芝ヶ原10号墳や直径58mの同11号墳などが6世紀前半まで築造される。同一丘陵上には37×40mの方墳である尼塚古墳や正道古墳群や芝ヶ原古墳群などの低墳丘方形墓群が築造される。先に述べた上大谷古墳群・西山古墳群とは大谷川の南側に墓域を有することから、それらとは造墓集団が異なると考えられる。

以上のことから上大谷古墳群・芝ヶ原古墳群・芝山古墳群は、いずれも庄内期に首長墓の築造が始まっており、方墳ないしは前方後方墳が採用されていることがわかる。

ちなみに三角縁神獣鏡が30余面出土した古墳時代前期の木津川市山城町椿井大塚山古墳や平尾城山古墳は、周辺に可耕地が広がらない状況であるにも係らず、傑出して古い大型の前方後円墳である。また、上大谷古墳群や芝ヶ原古墳群などのように首長墓の系譜を引く墳墓がそれ以降にみられないことなどから、

椿井大塚山古墳や平尾城山古墳は、在地勢力の自立的発展に伴って築造された首長墓ではなく、交通の要衝地に築造された畿内政権からの派遣將軍の奥津城と解釈される。^(注10)

従来、上大谷古墳群・芝ヶ原古墳群・芝山古墳群を久津川古墳群の支群として捉えられてきたが、各々の古墳群の首長墓の成立時期が庄内期に遡ることから、大谷川を挟んで築造された上大谷古墳群・芝ヶ原古墳



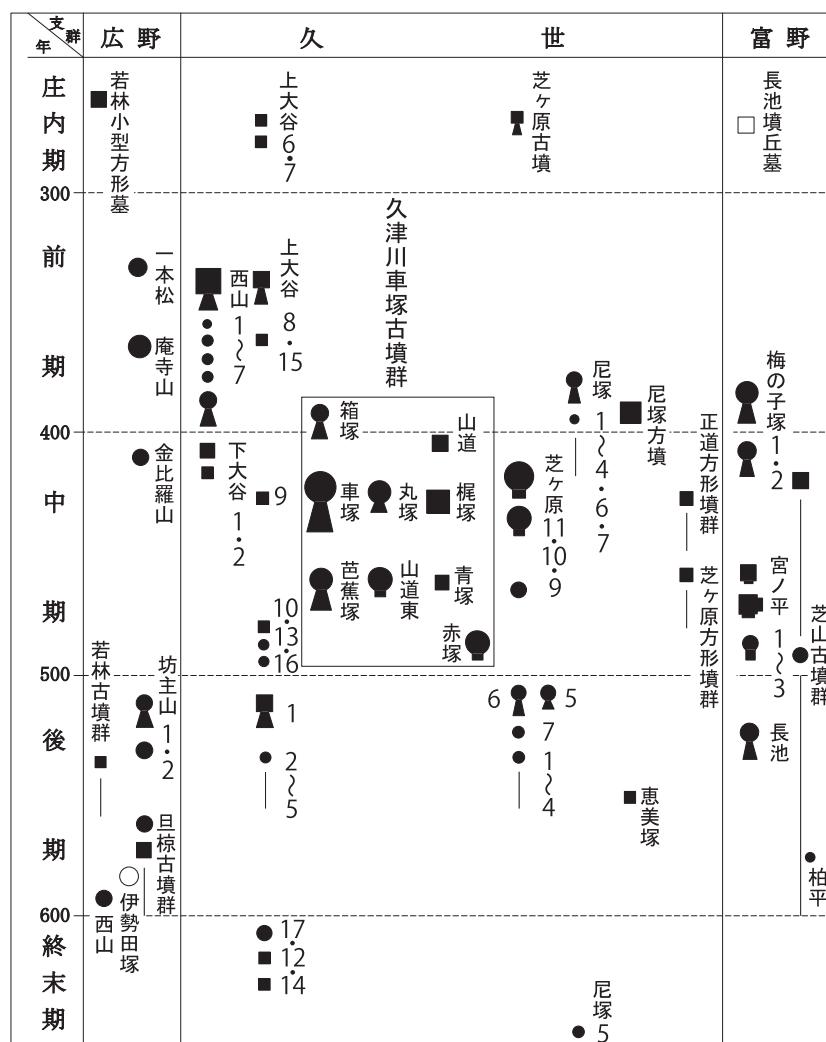
第6図 久津川古墳群(注11から転載)

群と南方に築造された芝山古墳群は、独自の勢力圏を堅持していたと考えるべき状況である。

4. 久津川古墳群再考

先に述べたように、従来、上大谷古墳群・芝ヶ原古墳群・芝山古墳群などが築造された宇治市伊勢田・広野地域から城陽市富野地域の全ての古墳が、久津川古墳群として認識されてきた。確かに、行政的には約150基を数える大規模な古墳群は、京都府内でも屈指の古墳群であり、一古墳群として捉えることは意味のあることではある。しかし、考古学的には多くの問題を内包していると言わざるを得ない。ここでは、改めて久津川古墳群について検討しておきたい。

長持形石棺を直葬する5世紀前半に築造された全長272mの久津川車塚古墳は、南山城地域の中でも最大の前方後円墳である。^(注11)その前後の時期には、箱塚古墳や丸塚古墳、芭蕉塚古墳などの前方後円墳が築造される。これらの古墳は、丘陵上に築造された上大谷古墳群や芝ヶ原古墳群とは異なり、大谷川によって形成された扇状地に築造されている。両者の築造原理は著しく異なつており、本稿では久津川車塚古墳群と呼称する所以である。一見すると、上大谷古墳群や芝ヶ原古墳群などの造墓集団の自立的発展により、南山城全域を統治する地域首長が畿内政権の干渉に



第7図 久津川古墳群編年表(注5から転載)

よって誕生し、久津川車塚古墳群が築造されたよう見える。しかし、久津川車塚古墳群と同時期であるにもかかわらず、上大谷古墳群や芝ヶ原古墳群の造墓活動が継続されていることは、在地勢力を基盤としつつ、畿内政権との一時的な結び付きを想定することができる。具体的には畿内政権から派遣された首長の墳墓が久津川車塚古墳であり、その系譜上に存在する首長墓こそが箱塚古墳や丸塚古墳、芭蕉塚古墳などの前方後円墳であると規定できる。

今後は、大谷川の扇状地上に築造された久津川

車塚古墳を中心とする古墳群を「久津川車塚古墳群」とし、大谷川の南北丘陵に所在する古墳群や芝山古墳群とは、区別して論じる必要があるのではないだろうか。

5. 芝山遺跡における古墳時代後期の様相

6世紀初頭に河内国樟葉宮で即位した繼体天皇は、511年に筒城宮、518年に弟国宮を経て、526年に磐余玉穂宮に遷った。特に、筒城宮造営・遷都は、南山城の古墳時代に大きな影響があったと予想できる。全長112mの前方後円墳である宇治市二子塚古墳の被葬者は、繼体天皇を補佐した人物と考えられる。一方、先に述べたように「今来才枝」の参入によって大規模化した集落が、古墳時代後期に畿内政権によって解体されることによって出現する群集墳は、それまで古墳築造を規制された地域にも築造される。一方、それらを築造した同族血縁集団あるいは擬制的同族集団にも優劣がある。例えば、畿内で盛行する横穴式石室をいち早く採用した城陽市青山古墳群や南山城最大の横穴式石室である城陽市黒土1号墳、多彩な副葬品をもつ宇治市坊主山1号墳や初期横穴式石室を採用した木津川市天竺堂古墳などは、有力集団の奥津城としてふさわしい。

一方、芝山古墳群R-4地区の埋葬施設からは、2振の蛇行剣が出土した。蛇行剣は盟主墳からの出土ではなく、小規模古墳から出土することが多く、現在、全国で約90余例の出土が確認されている。京都府内では3・4例目となる。また、長池古墳から出土した純金製の金環や宇治市坊主山1号墳から出土した銅釧や金環は、朝鮮半島製であり、長池古墳の琥珀製棗玉は、岩手県久慈産の琥珀を使用している。後期古墳の副葬品は実に多様であり、畿内政権との直接的な結び付きのなかで、有力家族などの地域勢力の再編や序列化が背景にあったと考えられる。

6. まとめ

在地勢力の自立的発展に伴って築造された上大谷古墳群・芝ヶ原古墳群・芝山古墳群と在地勢力を基層としながらも畿内政権との結び付きによって築造された久津川車塚古墳群の造墓集団の違いについては、依然として未解決である。また、具体的な氏族については、仁徳紀や新撰姓氏録にみられる「栗隈県」をあげられる程度であり、また、複数の天皇の妃を輩出した地域であることなどが久津川車塚古墳群の築造の背景としてあげられる程度に過ぎない。

以上のように、庄内期から古墳時代後期に至るまで古墳築造を継続した上大谷古墳群・芝ヶ原古墳群・芝山古墳群は、古墳時代中期に久津川車塚古墳群の築造があっても、一貫して造墓活動を継続している。広義の久津川古墳群において、上大谷古墳群・芝ヶ原古墳群と芝山古墳群は、共存する2勢力であったことを示している。

本稿作成にあたり、第7図の提供と久津川古墳群全般について当調査研究センター小泉裕司と芝山遺跡の最新の動向について同菅博絵両氏のご教示をいただいた。芳名を記し、感謝の意を表したい。
(こいけ・ひろし=当調査研究センター調査課長)

- (注1) 西谷真治・近江昌司・白木原和美 1965「6 長池古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
- (注2) 近藤義行 1972「長池古墳」『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室研究報告I
- (注3) 小池寛 1987「芝山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡発掘調査概報25冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (注4) 和田晴吾 1988「南山城の古墳」京都地域研 Vol.4 立命館大学人文科学研究所
- (注5) 小泉裕司 2021「久津川古墳群の動向」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群』雄山閣
- (注6) 菅 博絵 2022「城陽市芝山遺跡・芝山古墳群の土地利用について」『京都府埋蔵文化財情報第142号』(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (注7) 小池 寛 1991「南山城地域の後期古墳の一様相—城陽市・長池古墳を中心として—」『京都府埋蔵文化財情報第40号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
小池 寛 2014「京都府南山城地域における古墳出現期の一様相」『京都府埋蔵文化財情報第124号』(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (注8) 城陽市教育委員会 1997「森山遺跡発掘調査報告書」『城陽市埋蔵文化財調査報告書32』城陽市教育委員会
- (注9) 城陽市教育委員会 2014「芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書」『城陽市埋蔵文化財調査報告書68』城陽市教育委員会
- (注10) 注4に同じ
- (注11) 小泉裕司 2017『城陽市埋蔵文化財調査報告書73』城陽市教育委員会

本稿は、令和3年10月23日に行った京都府立山城郷土資料館での文化財講演会「共存する2つの勢力長池古墳・芝ヶ原古墳群と久津川古墳群」の講演内容を文章化したものである。

令和3年度発掘調査略報

5. 上野遺跡第4次

所 在 地 京丹後市丹後町上野地内

調査期間 令和3年8月25日～令和4年1月25日

調査面積 1,030m²

はじめに 上野遺跡は日本海に面する標高27mの海岸段丘上および斜面地に位置し、縄文時代から平安時代にかけての遺物の散布地として知られている。第3次調査では、後期旧石器時代前半期の石器の出土が確認されている。今回の発掘調査は、浜丹後線(上野平バイパス)民安閥連道新設改良工事に先立ち、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要 調査地は令和元年度に行われた第3次調査の海岸段丘下の平坦面に位置し、一部段丘斜面など3か所にトレンチを設定した。

第1トレンチは近現代の耕作土とそれ以前に流れ込んだ堆積土、AT(姶良丹沢火山灰)包含層の堆積が確認でき、耕作土の下から中世から古代の遺物包含層、古代の遺構面、AT包含層上面に古墳時代の遺構面を確認した。古代の遺構面を第1面、AT包含層上面を第2面として調査を行なった。第1面では、鍛冶に用いたと想定される炉跡などが9基、雨よけ溝、覆い屋の柱跡、廃棄土坑などの遺構が400基ほど検出され、土器陶磁器の他スラッグや漁労に用いた土錘や石錘が出土した。第2面では、竈跡が4基、竈が接続する竪穴住居が3基、竪穴住居に伴う柱跡や、掘立柱建物の柱穴、廃棄土坑など400基ほどが検出され、古代から弥生時代の土器や縄文時代の石器が出土している。

第2トレンチは段丘斜面地に設定した。近現代の耕作土の直下に基盤となる砂層が堆積しており、遺構面は確認できなかった。

第3トレンチは第1トレンチ東側に設定した。第2トレンチと同じく近現代の耕作土の直下に段丘礫層が露出し、遺構面は確認できなかった。

まとめ 今回の発掘調査では、第1トレンチにおいて古代の鍛冶炉跡、古墳時代の竪穴住居を始めとしたおよそ800基の遺構を検出した。特に古代の製鉄関連遺構が当地で確認されたことは、丹後地域の鉄の生産状況を検討する上で重要な成果である。
(加藤雄太)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 丹後中浜・丹後平)

6. 外村遺跡

所在地 京丹後市弥栄町溝谷地内

調査期間 令和3年11月16日～令和4年1月28日

調査面積 620m²

はじめに 外村遺跡は、溝谷川の右岸を中心に東西550m・南北200mの範囲に広がる弥生時代を中心とする散布地とされている。遺跡の立地は、北西に開けた狭長な谷地形の低地にあって、低位の河岸段丘や扇状地など微地形が観察される。発掘調査が行われるのは今回が初めてで、遺構の深度や広がり、遺跡の詳細な時代や性格などは不明であった。

調査は府道網野岩滝線のバイパス工事に伴って京都府丹後土木事務所の依頼を受けて行った。

調査概要 調査は、おおよそ東西165m・南北20mの範囲を対象とし、東西に連なる5か所のトレーニングを設定した。現況は水田で、調査範囲の中央に溝谷川支流の柏辺川が南北に貫流する。上流側の1トレーニングでは、耕土上面から約1.3m掘下げた標高47.6m付近で風化の進んだ花崗岩の岩盤を検出した。岩盤は、西(下流側)に向かって傾斜し、1トレーニングから約100m西の5トレーニングでは標高44m付近で検出された。

花崗岩岩盤上に2つの河川堆積物のユニットを確認した。下層の河川堆積物は、暗灰色で、大きいものは長径50cm超える円礫と花崗岩の風化した2～5mm程度の小礫から構成される。上層の河川堆積物は、円礫がやや小ぶりで茶褐色であった。各土層の間に有機物を含む堆積層はほとんどない。これは、洪水により地表面が洗い流され、土石流によって一気に土砂が堆積した状況を示している。

柏辺川よりも下流側では、柏辺川が運んだと思われる砂礫が広く堆積しており、上流側とは異なる堆積構造が確認された。



調査位置図(国土地理院 1/25,000 網野)

遺物は、近現代と推定される堆積層と整地層から、黒色土器底部片など土器片3点が出土した。

まとめ 今回の調査では、遺構は確認されず、調査地周辺は遺跡の縁辺部と推定される。対岸の丘陵には式内社溝谷神社があり、鎌倉時代の石燈籠が存在しており、少なくとも周辺に中世の集落遺跡の存在が推測される。なお、2回の土石流の痕跡は、調査地の地形形成を示すもので興味深い。引き続き行われる関連調査に期待したい。

(崎山正人)

7. 稚児野遺跡第4次

所在地 福知山市夜久野町井田
 調査期間 令和3年5月10日～12月22日
 調査面積 2,000m²

はじめに 稚児野遺跡は、牧川と畠川の合流点を見下ろす標高100～105mの小高い台地上に広がる。これまで縄文時代から中世にかけての遺跡とされていたが、昨年度の国道9号線の改良事業に伴う発掘調査で、今から約36,000年前の後期旧石器時代前半期の遺跡であることがわかった。約9か所の石器集中部が確認された昨年度調査に続き、その西側において本格的な調査を実施した。その結果、後期旧石器時代前半期に特徴的な石器の出土とともに、環状ブロックとみられる遺構の存在も確認した。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 福知山西部)

調査概要 調査は重機により耕作土のクロボク土を除去することから始めた。大きな成果がみられたのは、調査地北半部においてである。南半部については旧養豚場建設の削平により遺構・遺物はなかった。掘削の結果、地表下約40～50cmで約3万年前の始良火山灰(AT)を含む層の直下となり、その面から石器が出土した。石器の合計は約600点にのぼる。石器にはナイフ形石器(写真1左上2点)、台形様石器(同左下2点)、刃部磨製石斧(同右2点)など少量の定形的なものと、これらの製作過程で残される石核や多量の剥片・碎片などの石屑がある。昨年度の出土石器群と同様、剥片石器には二上山産サヌカイトとみられる石材を使用している点

が大きな特徴である。その他 の石材には石核、剥片・碎片にみられるチャートや、黒曜石剥片も少量みられる。黒曜石は隠岐島産とみられ、サヌカイトとともに遠隔地への移動や交流を考える必要がある。在地石材による刃部磨製石斧および斧形石器は、未製品を



写真1 稚児野遺跡出土の後期旧石器時代前半期の石器

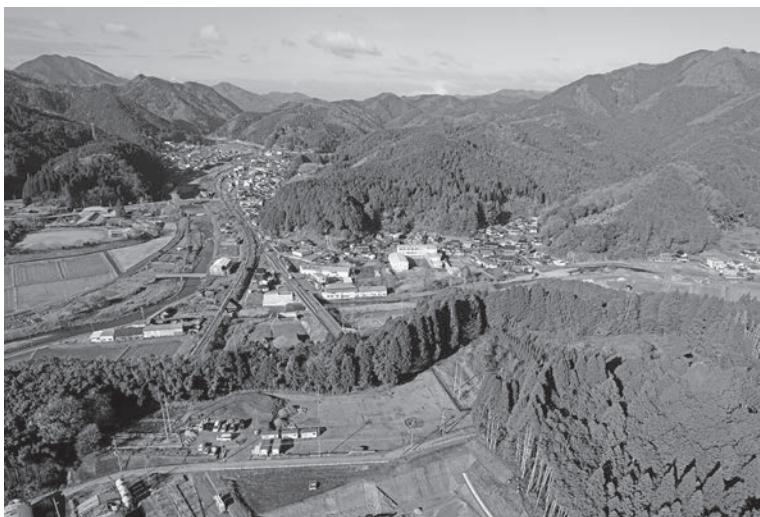


写真2 調査地遠景(上空東から、調査地は手前丘陵上)



写真3 環状ブロック調査状況(東から)

含め数点出土している。これらの石斧類は完成品が持ち込まれただけではなく、当地で石材を加工して製作している状況がみられる。石器の分布状況についてみると、およそ数メートルの範囲に石器の集中する石器ブロックが十数か所で確認できた。それらは石器の出土しない広場のような空間の周りを楕円形に取り囲むように配置されている。これは後期旧石器時代前半期にのみ出現する環状ブロックとよばれるものである。関東地方を中心につながっているが、近畿地方では兵庫県丹波篠山市の板井寺ヶ谷遺跡について2例目で、島根県原田遺跡を西限とする。環状ブロックの成因は、ナウマンゾウなどの大型獣の狩りを集団で行なった

とする説をはじめ、石器の製作と交換の場、まつりの場、集団間の緊張緩和や協調のための場などとされている。

まとめ 今回の調査で、京都府下ではじめて後期旧石器時代の環状ブロックの存在が明らかとなった。当時の寒冷な気候による丹波山地のなか、人々は時に集団で大型獣を狩り、石器の石材入手に遠く二上山や隠岐島にまで足を運び、さまざまな集団と交流していたと思われる。今後さらに石器の剥片剥離技術や接合関係などから、人々の他地域への移動や交流を具体的に考えいかなければならない。

(黒坪一樹)

8. 金生寺遺跡第10次

所在地 亀岡市曾我部町法貴深町

調査期間 令和3年10月4日～11月30日

調査面積 880m²

はじめに 金生寺遺跡は、亀岡盆地南西部の法貴谷川によって形成された扇状地に位置する。古墳時代から中世にかけての集落跡で、ここ数年間の調査で、古墳時代前期から中期前半にかけての水利施設や奈良時代後半の畦畔跡、中世前期の溝で区画された居館跡などが検出されている。

今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴うもので、近畿農政局の依頼を受けて実施した。

調査概要 調査対象地内に、1か所の本調査地(1トレンチ)と、その南側に2か所の遺跡確認のための小規模調査地(2・3トレンチ)を設定して実施した。

1トレンチでは、北側で、窪地状地形S X01と、溝状遺構S D02を検出した。S X01は、径18m以上を測る弧状の落ち込みで、最深部では0.6mの深さを測る。埋土から、縄文時代後期から古墳時代後期にかけての土器が出土した。S D02は、S X01の埋土除去後に検出した。S X01の周縁部に沿うように弧状に巡る。遺物は出土していない。このような状況から、S D02はS X01に先行する、もしくは、同時に併存したものと考えられる。これらの遺構は、S X01の出土遺物から、古墳時代後期頃まで存続していたと考えられる。

2・3トレンチでは、顕著な遺構は検出しなかったが、南側で河川堆積と考えられる砂礫層を検出した。遺物は、床土から出土するのみで、調査面以下からは出土していない。

まとめ 今回の調査結果から、調査対象地の旧地形は、南側に河川、北側にS X01のような後背湿地がある、自然堤防状の地形であったと考えられる。集落を営むのに適した地形であるが、今回の調査では、後世の水田造成による削平のためか、顕著な遺構・遺物は認められなかった。しかし、周辺に集落遺跡などが残存している可能性が、充分に想定される。

(引原茂治)



調査位置図(国土地理院 1/25,000 法貴)



写真 S X01・S D02(南西から)

9. 犬飼遺跡第10次(L地区)

所在地 京都府亀岡市曾我部町犬飼他地内

調査期間 令和3年7月1日～令和4年1月17日

調査面積 2,000m²

はじめに 犬飼遺跡は、亀岡盆地南西部の法貴谷川によって形成された扇状地に位置する古墳時代から中世にかけての集落遺跡である。これまでの調査で古墳時代の流路や古墳時代から古代の建物跡、中世の方形居館跡等を検出している。今回の調査は、法貴谷川広域河川改修(加速化1級・防災安全)業務委託に伴い、京都府南丹土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要 今回の調査では、調査対象地内に5つの調査区を設定した。調査地北側、犬飼遺跡第7次調査の南側に設定したL地区では、古墳時代の竪穴建物1棟と流路、時期不明の土坑複数を検出した。調査区北西端で竪穴建物の南東隅を検出した。周壁溝を有し、北西側は調査区外へと延びるため規模や主柱穴の有無は不明である。埋土から布留式土器片が出土したことから古墳時代前期と考えられる。調査区南東端で検出長19m、深さ1.2mの北東へ延びる流路の西端を検出した。東端が調査区外のため流路幅は不明であるが、上層からは布留式土器や古墳時代後期の須恵器が出土したが、下層から遺物は出土しなかった。

南端に設定した1トレンチでは中世の土坑墓2基、溝3条、溝で区画された掘立柱建物1棟、柵列1条を検出した。土壙墓1は、方形に石を配した墓壙から白磁碗・皿、青磁小壺、土師器皿が出土した。遺物から13世紀と考えられる。土壙墓2は石組みの中に丸太を割り貫いた木槽を配置する。墓壙から遺物は出土しなかった。検出した溝3条は、ほぼ南北方向に掘られ、法貴谷川から水を引く水路と考えられる。各溝の時期が若干異なることから、洪水などで溝が埋没するた

び掘り直されと考えられる。溝検出面の下層からは方形に区画された掘立柱建物と柵列を検出した。溝内から13世紀の土器が出土し、短期間で居住区から耕作地、墓地へと移行したことが明らかとなった。13世紀の下層からは土石流、洪水堆積層、その下に水田層を確認した。

まとめ 今回の調査では、各調査区で洪水に堆積に伴うラミナ層を確認しており、たびたび洪水被害を受けながらも土地利用が行われていることがわかった。
(菅 博絵)



調査地位置図 (国土地理院 1/25,000 法貴)

10. 木津川河床遺跡第37次

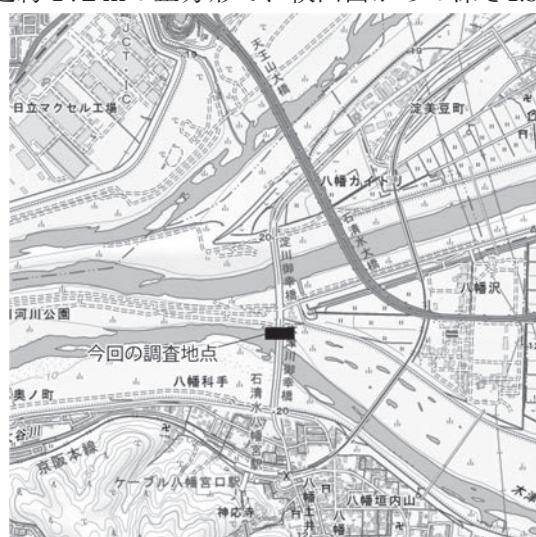
所在 地 京都府八幡市八幡

調査期間 令和3年6月1日～令和3年10月11日

調査面積 800m²

はじめに 本調査は、令和3年度に管内一円(木津川御幸橋)橋りょう維持修繕事業に伴い、京都府山城北土木事務所の依頼を受けて実施した。木津川河床遺跡は昭和57年度より計36回の調査が行われている。今回の調査地は、木津川、宇治川、桂川の三川合流地帯に位置している。過去の調査では、弥生時代、古墳時代の集落や中世の島畠、明治時代の水制など、幅広い時代の遺構・遺物が確認されている。今回の調査では、古墳時代前期の竪穴建物・溝、飛鳥時代の竪穴建物、平安時代末～鎌倉時代初頭の井戸、江戸時代の街道「御幸道」の道路側溝と考えられる溝、御幸道に伴う水路が検出されている。

調査概要 今回の調査では、古墳時代から江戸時代にいたる時期の遺構を同一面で検出した。調査区は南北約11m、東西約73mで、調査区西半に遺構が集中した。古墳時代前期の遺構としては、竪穴建物1棟(竪穴建物1)と溝1条を検出した。竪穴建物1は1辺約3mの正方形で、調査区西端に位置した。溝は幅約1.5mで調査区中央部に位置した。埋土より大量の土器が出土した。飛鳥時代の遺構としては、竪穴建物2棟(竪穴建物2、3)と、竪穴建物に伴うと考えられる炭化物集積遺構を検出した。竪穴建物2は短辺約3m・長辺約4mの小型の竪穴建物で、南辺に小型のカマドを検出した。竪穴建物3は約短辺4m・長辺5mで、土器の他に鉄滓と金属滓が出土した。竪穴建物2、3の近くでそれぞれ2つずつ炭化物集積遺構を検出した。そのため、この2棟の竪穴建物は何らかの工房的性格を持つ施設であると考えられる。平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構としては井戸を1棟検出した。井戸は平面形が1辺約1.2mの正方形で、検出面からの深さ1.8mを測る。構造は縦板横桟どめで、隅柱は横桟に挟まれる形でそれぞれ独立している。縦板50枚、横桟20本、隅柱12本を数える、非常に堅牢な井戸である。井戸の底では曲物による井筒が出土し、小型の曲物も1点出土している。また、井戸内埋土、掘方埋土からは大量の土師皿、瓦器碗が出土した。江戸時代の遺構としては、「御幸道」道路側溝と考えられる2条の溝と大規模な水路を検出した。2条の溝はそれぞれ西側が幅約0.7m、東側が約1mを測る。東西の溝に挟まれた幅約4mの空間が御幸道に当たると考えられる。なお、路面



調査地位置図 (国土地理院 1/25,000 淀)



八幡山上山下惣絵図(国立公文書管内文庫蔵)



推定「御幸道」と水路(南から)

している。そのほとんどが堅穴建物や溝、井戸埋土など遺構に伴う遺物であり、コンテナで100箱ほどを数える。

まとめ 今回の調査では、推定御幸道関連遺構を初め、飛鳥時代から江戸時代まで幅広い時代の遺構を確認した。

飛鳥時代の遺構は木津川河床遺跡においてこれまで確認されておらず、周辺の土地利用や生業を考える上で非常に貴重な資料を得ることができた。平安時代末～鎌倉時代初頭の井戸については、非常に精巧で堅牢な作りをしており、その用途については今後の重要な検討課題である。井戸枠材の分析を通じて考えていきたい。そして何より、これまで正確な位置が不明であった御幸道と見られる遺構を確認できたことは大きな調査成果と言えよう。中世より石清水八幡宮を中心に発展してきた周辺地域において、御幸道とそれに伴う水路は水陸における交通や物流の要衝であったと考えられる。今後八幡市域の地域史を考える上で、重要な成果を得ることができた。

(大石雅興)

は後世に削平されており、残存していない。推定御幸道の東側の水路は幅約7m、深さ約1.2mを測り、両岸を杭で護岸している。

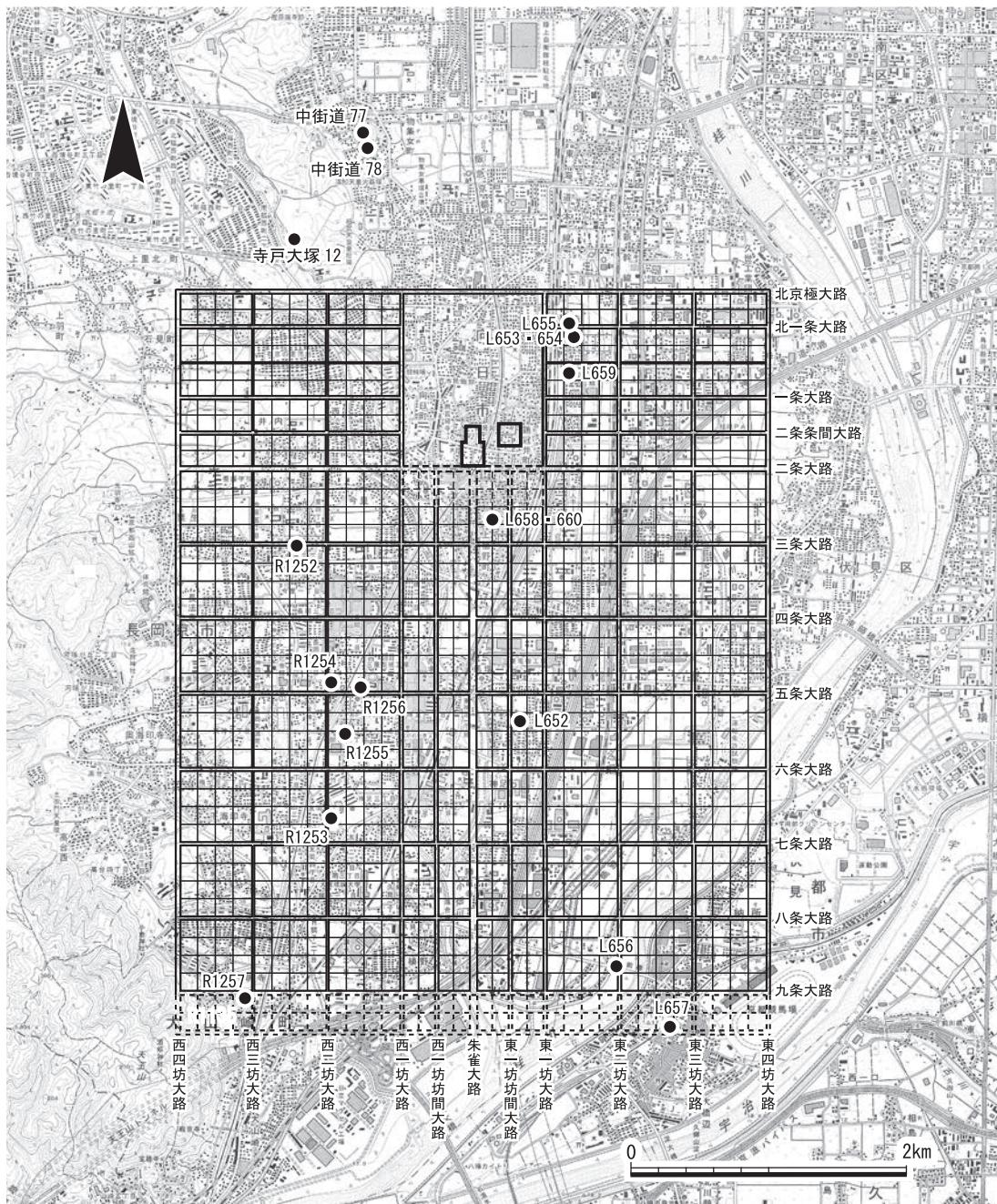
御幸道とは、江戸時代に整備された街道である。石清水八幡宮の参道としての性格をもち、京街道につながる基幹道路であったと考えられる。18世紀中頃に描かれた絵図に、石清水八幡宮から延びる御幸道と、並走する水路が確認できる。今回の調査で検出した2条の溝とそれに伴う水路から18世紀の遺物が出土している。

また、平成16年の第16次調査で、木津川を挟んだ木津川御幸橋の対岸を調査した際、今回の調査で検出したものとほぼ同じ規模の溝と道路状遺構、道路状遺構の東に大きな落ち込みが出土している。このことから、今回の調査で検出した一連の遺構を御幸道であると推定する。

出土遺物 土師器、須恵器、瓦器をはじめとした土器を中心に多く出土している。数点ではあるが、木製品や金属製品も出土

長岡京跡調査だより・138

長岡京跡の発掘調査情報の交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。令和3年12月から令和4年2月までの例会では、左京域9件、右京域6件、京域外3件の合計18件の調査報告があった。その中で、調査の終了したものを中心に略述する。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域 報告案件はない。

左京 左京第652次調査(雲宮遺跡、長岡京市神足ミドロ)は小畠川が形成した扇状地内での調査である。左京六条一坊十町にあたり、長岡京期の隅柱横棧組の井戸・柱列が検出された。このほか、古墳時代と思われる柱根の残る柱列も検出されている。**左京第653～655次調査**(向日市森本町春日井・上町田)は、継続する区画整理に伴う調査で、第653次調査で北一条大路の南北測溝を確認した。左京654次調査では方形周溝墓の可能性のある弥生時代の溝を確認している。**左京第657次調査**(淀城跡・京都市伏見区淀池上町)は長岡京推定域範囲の南端にあたり、周囲から長岡京期の遺構は発見されていない。この調査は、淀城跡の東曲輪、家老屋敷の調査にあたる。江戸時代後期から幕末の遺構面では礎石建物3棟が検出された。礎石や遺構面は被熱を受けており、鳥羽伏見の戦いで焼失したことがわかる。この遺構面の下0.7mに江戸時代後期の遺構面があり、3棟の礎石建物は0.7m嵩上げされた整地土の上に築かれている。礎石建物2棟は、下層の建物の礎石の上に蠍燭基礎と呼ばれる石柱を用いて建築されたものである。下層では、4棟の礎石建物と石垣が検出されている。**左京659次調査**(石田遺跡・向日市森本町石田)では長岡京期を前後する南北方向の溝が検出されている。

右京 右京第1252次調査(今里遺跡・乙訓寺、長岡京市神足2丁目)は、白鳳期創建の乙訓寺の南側にあたる。昭和41(1966)年の発掘調査で検出された講堂と推定される建物の108m南にあたる位置から南北方向の揃う大型の掘立柱建物跡が検出された。その位置・構造及び建物方位から、長岡京の造営に伴い整備された乙訓寺の南門跡と推定された。門に回廊状の建物がとりつく。7世紀後半の遺構も見つかっており、乙訓郡衙との関係も注目される。**右京第1254次調査**(開田城ノ内遺跡、長岡京市長岡2丁目)では、奈良時代～長岡京期、平安時代～中世の2時期にわたる溝・土坑などが検出された。**右京第1255次調査**(開田遺跡、長岡京市開田3丁目)では、六条条間小路南測溝および西二坊坊間西小路東測溝が検出された。六条条間小路南測溝は幅3.5mと広く、検出面からの深さも0.5mを測る。**右京第1256次調査**(開田遺跡・開田古墳群、長岡京市開田1丁目)では、西二坊坊間小路西側溝と五条二坊十二町の町内溝が検出された。築地が想定される位置に東西の柱穴が並ぶ。**右京第1257次調査**(円明寺跡、大山崎町円明寺香田)は、中世円明寺の推定東門(小字大門)の界隈にあたる。深さ2.8mを測る鎌倉時代の井戸が検出された。過去の周辺の調査でも13世紀と14世紀の井戸が検出されている。

京域外 寺戸大塚古墳第12次調査(向日市寺戸町芝山)では、東くびれ部で範囲確認調査が実施された。くびれ部は大きく削平されており、墳丘断面を観察することができた。くびれ部の後円部側では、葺石・敷石が良好な状態で検出された。**中街道遺跡第77次調査**(向日市物集女町中条)では、平安時代(10世紀代)の土坑1基が検出され、土坑内から瓦を含む多量の土器類が出土した。

(肥後弘幸)

現地公開

(令和3年12月～令和4年2月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財の発掘調査成果を広く府民の方々に報告し、地域の歴史への関心を深めていただくため、当調査研究センターが実施している京都府内の発掘調査の成果について、現地説明会などの現地公開を行っている。

現在、当調査研究センターでは、令和2年の年頭から全世界規模で猛威を振るった新型コロナウイルスに対する感染拡大防止の観点から、現地説明会・現地公開については、情勢を見極めつつ、実施の可否を判断しているところである。令和3年9月30日に府内のまん延防止等重点措置が解除されたが、再び令和4年1月27日に府内においてまん延防止等重点措置が行われ、3月4日現在3月21日まで期間延長されているところである。そのため、この間の現地公開にあたっても、十分な感染予防を実施した上で行った。

現地説明会

稚児野遺跡 昨年度の京丹後市の上野遺跡と並ぶ府内最古の旧石器時代遺跡を発見したと記者



環状ブロックを見学する人々



ブロックでの石器の出土状況

発表し、大きな話題を呼ぶところとなったが、コロナ禍の中、現地公開・現地説明会は実施できなかった。今年度は、新型コロナウイルスの感染状況が小康状態の中、11月30日(火)に記者発表を行い、12月4日(土)に現地説明会を実施した。

今年度の稚児野遺跡の発掘調査の最大の成果は、後期旧石器時代前半の約36,000年前の環状ブロックが見つかったことであり、現地に一部石器を残した状態で、その出土状況を見学いただいた。雨で足元がぬかるむ中、63名の参加を得ることができた。なお、新型コロナウイルス感染予防のため、受付に際して、検温と連絡先の確認を行っている。

佐屋利遺跡 山陰近畿自動車道と一体となって整備の進む大宮峰山インター線(国道312号)に伴い京丹後市峰山町で実施して



佐屋利遺跡3区での説明状況



幾坂東古墳群ほか出土遺物見学状況



上野遺跡児童見学状況

葬品として出土した玉や鉄製品に関心が集まった。

上野遺跡 京丹後市上野遺跡でも、12月16日(木)に地元向け現地公開を行い、15名の参加を得た。古墳時代の鍛冶炉や堅穴建物跡などを見学いただいた。

学校見学 現地説明会・現地公開などとは別に、随時近隣の学校からの見学を受け入れている。稚児野遺跡では、福知山市夜久野学園の児童生徒42名が、佐屋利遺跡では、しんざん小学校の児童67名が、上野遺跡では宇川小学校の児童15名が見学し、地域の歴史について学習した。

(肥後弘幸)

普及啓発事業

(令和3年12月～令和4年2月)

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、「関西考古学の日」関連事業への参加などの普及啓発活動を行っている。

現在、当調査研究センターでは、現地公開と同様、新型コロナウイルスに対する感染拡大防止の観点から、埋蔵文化財セミナーをはじめとする普及啓発事業について、情勢を見極めつつ、実施の可否を判断しているところである。

なお、事業の開催に当たっては、十分な感染予防を実施した上で実施している。

また、今回報告の3事業はいずれも京都府教育委員会からの受託事業として実施した。

(1) 埋蔵文化財セミナー

第148回埋蔵文化財セミナー 令和4年2月26日(土)にJR長岡京駅前、長岡市中央生涯学習センター(バンビオ1番館)ホールにて開催した。「都をつくる 恭仁宮と長岡京」と題し、近年の恭仁宮跡と長岡京跡の発掘調査成果をとりあげ、3人の講師の方から調査成果を中心に報告いただいた。まず最初に、京都府教育委員庁文化財保護課の桐井理揮氏からは、「恭仁宮跡の最新発掘成果」と題して、木津川市所在の国史跡恭仁宮跡の最新の発掘調査成果について講義いただいた。次いで、当調査研究センターの松井忍調査員が、平成元年度か



第148回埋蔵文化財セミナー聴講風景



中島皆夫氏講義風景



ロビーでの遺物解説状況

らの3か年に調査した長岡京跡右京第1201次調査、同1233次調査、同1241次調査について、「長岡京の大路に面した宅地の調査」と題して報告した。最後に、(公財)長岡京市埋蔵文化財センターの中島皆夫氏から、平成29年度から今年度にかけて長岡京市内で行われた1町以上の敷地をもつ大規模宅地の調査成果4件について、「近年発見された長岡京内の大規模宅地について」と題してご報告いただいた。

今回のセミナーの実施に際しては、長岡京市教育委員会の後援を得て、市広報紙2月号で案内をいただいたこともあり、長岡京市内在住の36名の方を含め120名の方に参加していただくことができた。発表内容についても非常にわかりやすかったと好評であった。

なお、新型コロナウイルスまん延防止等措置期間内でもあり、以下のことに留意して実施した。
①密を避けるため、400人の会場を150人制限として実施。
②参加人数を制限することと連絡先を確認するために、往復はがきでの参加申し込み制とした。
③受付においては、手指の消毒を願い、体調確認の上、検温を実施した。
④自由席でしたが、銘々の着座場所が確認できるよう工夫した。



京都府庁展示ロビーでの展示状況

(2)府庁2号館1階展示ロビー

京都府庁の職員及び来訪者向けの展示スペースにおいて、埋蔵文化財の保護の啓発と当調査研究センターの活動報告を兼ねて、毎年展示を実施している。今年度は、12月10日(金)～12月17日(金)の間、「京都最古の遺跡」と題して、京丹後市上野遺跡と福知山市稚児野遺跡から出土した後期旧石器時代前半期の石器資料を展示した。



『もっと知りたい京都の歴史』第9号

(3)普及啓発紙「もっと知りたい京都の遺跡」

当センターでは、府内の埋蔵文化財の普及啓発を目的にA4二つ折りのカラーリーフレットを毎年2号刊行している。

第9号として、「剣と刀」と題して、府内出土の弥生時代と古墳時代の剣と刀を取り上げた。石剣、木製の柄、鉄剣、鉄刀、金銅装大刀など21点を掲載している。5000部印刷し、府内を中心に900機関へ送付している。ちなみに、表紙下段の京丹後市高山12号墳出土の金銅装双龍環頭大刀の柄頭は、当調査研究センターのロゴマークの元となつたものである。

(肥後弘幸)

センターの動向

(令和3年12月～令和4年2月)

- 12 3 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：向日市、今村総務課長)
- 4 稚児野遺跡(福知山市)現地説明会(参加者63名)
- 6 稚児野遺跡福知山市立夜久野学園児童・やくの生徒現地見学(参加者42名)
- 10 府庁ロビー展「京都・最古の遺跡」(於：府庁2号館～17日)
- 14 上野遺跡(京丹後市)京丹後市立宇川小学校6年生現地見学(参加者13名)
- 16 上野遺跡近隣地区対象の現地公開(参加者15名)
宇治市街遺跡(宇治市) 現地調査着手
- 18 幾坂古墳群ほか(京丹後市)出土遺物公開(参加者57名)
佐屋利遺跡(京丹後市)現地説明会(参加者55名)
- 20 第41回理事会(オンライン併用)
- 21 稚児野遺跡(福知山市)現地調査終了(5/10～)
佐屋利遺跡 京丹後市立しんざん小学校5・6年生現地見学(参加者67名)
- 22 長岡京連絡協議会
- 1 22 ふるさとミュージアム山城文化財講演会講師派遣「上野遺跡・稚児野遺跡の旧石器時代－京都府北部を中心に－」面主任
- 25 上野遺跡(京丹後市)現地調査終了(8/25～)
- 26 長岡京連絡協議会
- 27 外村遺跡(京丹後市)現地調査終了(11/11～)
- 2 6 令和4年4月採用職員採用試験(於：京都市)
- 10 カンジョガキ遺跡・幾坂古墳群ほか(京丹後市)現地調査終了(5/6～)
- 12 ふるさとミュージアム山城文化財講演会講師派遣「城陽市小樋尻遺跡の大溝－「栗隈の大溝」を考える－」福山主任
- 16 菱田理事法貴北古墳群(亀岡市)現地指導
長岡京連絡協議会
- 18 令和3年度第2回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(リモート開催、小池課長)
- 23 国道9号夜久野改良事業説明会(於：福知山市、小池課長・中川課長補佐)
- 25 令和3年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(リモート開催、阿部局長、肥後次長)
- 26 第138回埋蔵文化財セミナー「都をつくる－恭仁宮と長岡京－」(於：長岡京市、参加者120名)
- 28 木津川河床遺跡(八幡市)現地調査終了(11/19～)
宇治市街遺跡(宇治市)現地調査終了(12/16～)

編集後記

新型コロナウイルスにより日常の風景が変わって早2年が過ぎました。加えてロシアがウクライナに侵攻し、世の中には不穏な緊張感が漂っています。そのような中、穏やかな春の陽のもと、新しい年度が始まろうとしています。ここに『京都府埋蔵文化財情報』第142号が完成しましたので、お届けします。

本号では、長年の調査が終了した芝山古墳群・芝山遺跡の調査成果をはじめ4本の研究ノートを掲載しました。いずれも当センターの調査成果を踏まえた力作となっております。ご一読いただきますようお願いします。

新しい年が、平和で、むかしどおりに現地説明会や講演会が普通にできる日常が戻ってくることを願うばかりです。今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻をよろしくお願いします。

(編集担当 肥後弘幸)

京都府埋蔵文化財情報 第142号

令和4年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>



印刷



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER